



辭といと廣き地乃さつこ生ひ立ちる本
地。毫と咲。葉と茂り。石葉とちり。楮と
枯て。時此もがさぞおふるがことく。たぐた乃
づら地均なるべし。かくて久き地天地を
又あらが祿地地乃さつこも。輝くさき地
里一むろし。遠く。重くかまりし

亦能序一

いふしへふかをらねい。天地海地地をい
うまうことわけあつまる大御方さる書
ふハかき地をて。考繩地長く傳り。淡茅
原地づらにのこまはあ。海してまは地古
言と。國の史を地集ふみえたるいとさ
ハねり。又そ地を地定もりの教よる

知ると記す。いとも花林の照たるに
ごとく。入るはまよふ處さかすもたなく。
夏も花もあきも仲ふ。たましくさけさ
わさつこきもあまて。秋の暮業乃今十
か。とまてもみかこく。たはてなげくも
結るめれど。はさるるを花指乃あから

小苑序二

はまあて。あるせ留飯名れみとたもなれハ。
花彈山乃松本よ打墨繩のたて印とた
小松をひしらて。俾勢はありそ小引網の
ひるあ留ふあづさひならう。志うしてあ
たまは来月をかき。まかゆをひまいて
後と結りなむ。こぞはさのつらうれ

くいと姑と古言と一も姑をひたらしむる
きみの今一語らふと姑とくくなるべし。又
後姑世より縁縁と号せしむる云あり。是れ次
姑つがひ白よ。是れ姑つがひ續く五言とありしなり。つら
ある云書ふよりて。されら姑と考らるに。志
下りつらく意姑と云ら。ぬと云姑と云らるべし。

小書序三

言あり。七云あり。十まり二言あり。十まり七
云なるもさぐるら。号ていさぐ皆縁縁あり
ましと。それ各唱久く。各縁縁語序かたね
縁ありしなり。各と云一後姑抱なまは。志ひ
てあげつらふも阿らる。志よ枕詞福徳抄
らふ書と云るに。被五言姑と云かいつらるべし。

是ふと記あるに禪とつけし物あり今又
其の昔よ淺きころ存信とさるるらん
わしと記あるに河をつけ是と河州小苑
とあつて都よんはそをみとる人と即我
彼とて。後張なる海の人ひとりたひら
乃湯鞍ひとりと成りし終をあら抄け

不苑序口

書ふみえしる河州後さふも阿らは。識り
さくやうなる苑はべよたぐへて。けし書は名をせ
とらふべなるかも。志うハあまど。其地はさま乃
いあへふ加りしころ心とさやうして。古の書
ゆんと思ひ入るころ。是れ河州より摘きてけりハ
終よ奴昆留都美比田都美をど取ら

增補河州小苑

あはれ部

ひささし

あめ

瓢葛此天とつてけなり。コカの反カ。ツラの反夕。よつて
ひささしとつてけなり。はあまろくそくそくとよめる例多し。又瓢
葛乃文字小幸ると續日本後紀よんゆ。さて瓢葛此
事也。神代紀よ天吉葛此曰阿摩能與佐圖羅
即是瓢あり。又鎮火祭祝詞よ曰更子生本神

あ

小苑九七

云。さるる伊井冊尊此（ま）生（ま）ませる亦（ま）まて。もと天（あ）は
おられハ。あべて天（あ）は（ま）なる縁（ま）縁（ま）とす。いふハ
天（あ）は川（ま）系（ま）。天（あ）は（ま）どつてけし（ま）た（ま）なり。又ひささ此
天（あ）と（ま）はく（ま）。甄（ま）葛（ま）の天（あ）は（ま）と（ま）は（ま）ふ（ま）ふ（ま）。
又今此人（ま）。ひささ（ま）と濁りて（ま）。曾（ま）て濁（ま）る例
なり。和名甄（ま）と奈利比佐古（ま）と（ま）は。是（ま）は（ま）を
斟（ま）水（ま）と飲（ま）む器（ま）と（ま）は（ま）。今（ま）は（ま）と（ま）は。
別（ま）は（ま）あり。さる比左古（ま）と（ま）は（ま）。必ず（ま）は（ま）て（ま）。
又比左箇多（ま）此（ま）飯（ま）字（ま）と（ま）は（ま）。賀（ま）多（ま）と（ま）は（ま）て（ま）。

亦此一

さる例なり。あられハひささ（ま）と（ま）は（ま）て（ま）。曾（ま）て濁（ま）る例
なり。冠辭考ひささ（ま）の（ま）は（ま）。仁德紀（ま）と全匏（ま）。宇
都比佐（ま）基（ま）と濁字（ま）此（ま）基（ま）ふ（ま）と（ま）は（ま）。是（ま）と（ま）は（ま）。
全匏（ま）の文字（ま）ハあきど。右（ま）は（ま）字（ま）此（ま）飯（ま）名（ま）事（ま）なり。是（ま）と（ま）は（ま）。
人（ま）を（ま）ふ（ま）と（ま）は（ま）。

久さ此

あま照月

ひささ此

天此志これ

あま照月の重なりをう（ま）と（ま）は（ま）て（ま）。曾（ま）て濁（ま）る例
なり。クレの反ケ。志（ま）け（ま）と（ま）は（ま）。常（ま）は（ま）河（ま）と（ま）は（ま）。志（ま）け（ま）日（ま）なり。

とひ事あり。仍て雨といふ詞を加へてふむが本此語
なり。つけ此意よなり

ひさし此

昨夜此句

夕といひゆべといひ。昨夜といふべといふ。是といふべ乃
詞を滿てつけたり。又いふといふ事と夜歴といふ義を

昨夜一夜を歴といふと云ふあり。フへの反へ

知解

曉園

けくろと唱ふこと。都久欲と飯字去れあまならふ。
そめつくとふむへさ飯字此例あり。卷十四國風俗此

小北一

ふとつくと此ももあり。さて夕月をやく入るおを曉ハ
くらし。故小は霧語と云。あつさる時といふなり

鳥

吾妻

鶺鴒あつ明あつといふつけあり。あぐまといふゆハ景行記ハ
阿豆麻波夜と倭建命のまひーはよりてなり。仍て
あ此言よりけり。アカの反?

あらしひく

朝

赤ら引物とつけり。是と旭乃あらしふさうし
しるといふ

とつめて。よ下よりなるなり。宿舎しゆくしやと必かならずど物ものふふと
誠まことて異所いしよは極たぎる物ものあれは。核こり人ひとをど姑こあつて。

花はな多た此こ

あすか 明日香 大和

是こゝと花はな多た此こ函はこといふつげあり。戸ととカの詞ことばおまふ

中なかつりひは

あし 石 播磨

吾われこころ

あし此こゝ浦

是こゝと明あきさ知しといふ事こととよ下した少すくて。つげたり

さなへるまふ

あしと神かみ

小苑せうゐん

さびら小せう蠅じやうなり。あすハ如ごとといふ氣き。あす此こゝ詞ことばとよべて
志こころあり。強つよまといさほひあふあふと。さむらうとく立た降ふ
ぶて朝政あさせいは陸りくハさる。神かみなり。神代かみよ此こゝ事ことなれば
あつ少すくと神かみといふり

あしと此こゝ

あす 賽

蘆あしうひら蘆あし此こゝ苗なへなり。よつて賽あすふよそて詞ことばとあし神かみ
ふるあり。賽あすは。是こゝ病やまひひ。是こゝ志こころまへといふ事ことなり

花はなぐら

あす 葦垣

ふらと好このめる詞ことば。是こゝと葦あし此こゝ花はなと好このめるともなりあは

葦、漚てよかゝる。

さくらとび

あ

萩此小あるものら蓋あり。よつて悪の詞よせしり。

松を漚く小蘆も飯べ

くさねの乃

淡葉此野ら

茂葉もまじりも

呉藍

りのある

かりノアの反ナ。よつてあると唱ふ。呉國より淡

まぶあり。こゝは淡とつげると。紅もを淡さしり

あまのなかり

ちりごぬこ

ありて後ま

ありまぬら。明玉衣とつめる詞よえ。珠衣此事あり

さてラタの三言反してラの一言と形る。よつてラキの反リ

と形り。又リとキとお母ふ放よ。まをたへていふ時と。ま

此詞にのづらつらありて。キ又とある。ほぐけれ念と

あり此詞とくは福する。まをたへり。又の同葉ありてとつ

いそりれ

淡海 今近江と也

いそりれと淡海は臨海此とあつてあつてわらふと

あふとらちをうとし。いふ言の約あり。よつてあハを

間とさり。岩搦此間といふことなふよせしり

妹が加み

上ありは竹ハ葉ハ野ノ 不不詳

妹はつまとり。髪をあげるといふは古語なり。は地名
の後にはがう。三浦は漢よりあつた。いふもゆり

いふふい

あごれ松系志摩

是は妹よといふ吾待といふことごとくあつて。英虞比松
系よりいふ。さてゴノこの三言反りてかとなる。かとい
とおをへば。ゆは河をたのづかうてきて。あがまるといふ
詞となるあり。我とあがといふは古語

うほり此

綾

不不詳

英虞比英虞比緩あり。クオの反コ。うてうまうりとある。英虞比
める詞をて式教語をゆきあはし。ゆは河といふ河はか
とまへ

うほり此

あべ倍播

味相甘播味相甘播なり。アマアメアペ言おぬふ。うてうまうとあ
あべ播なりといふてけなり。和名妙。橙。河倍多知
波系。

志あがとり

あは

志あがとりと志あがとり鷗鷗。又ういづりといふ。あとの一言

ようげふるら。あは長息此をよて。嗚呼といふ後なり。
志あがどりの息此をよるあまは。さるゑよてあといふ
けしなり

玉の徳此

間

おれ徳とあをさるる細なり。つらねし珠此あひぶと
いふばうれつけあり

おらげ

蘆城 菟茶

おら飾あり。うらげら今いふ搦筥あり。さそつけれえ
ら用とて海。あさりしおをふ河なり。その夜とニキの

反。ニキトかうふ事ら例多し

おら海

河

おら飾。さまら鏡此古語。蓋と實此合ふよをて男
女此合ふといふ。

おら海

河 倍 鳴 山

不 洋

是ら合と海とてつくべしと。河倍と濁りてあま
るら。おらうら海といふ。おらもつけれらるがよ

たつあつく

青 垣 山

うらあつくら指並附なり。さ垣山とて四方よめられ

る事少といふ。地名はわらび。垣とめぐらるる地あり。外も

ありとされ

おまじ此溪 不詳

夏草此志ありあへると志あり。允恭記輕此太子伴源へあがされぬ時。送り此所かよある地名されハ伴源此方あり

よまよし月

麻でこぶと候

生ひころ麻と此このつげあり。又あきでと麻布なり。夕への二テ。唯麻袋此事と志あり

小此

坐待月

昭石 播磨

は月此事と後よら十八表此月とす。あつをゆらんり。けつけのゆをかそく出る月あり。表とありといふ事あり

おはまま此

あつぬあゆえ

是らありといふゆとさねとつげあり。又あつと島ありといふゆり

海くさつ苗

黄燈

はま此河とあまよりていさうらふらと。是れと真といふ

御執なり。ラ之の反リ。のべてとことらしとありつむむの
ことりとある。天望はあそむる御弓なり。梓弓とよま
らち梓此本をて他はる弓なり

みげむふ

澄海

みげと供御あり。粟あどもなる物あまはあつひ
つげり

みげむふ

味系官 松付

鴨小味危あり。奥又鯨あり。つぎは少てもあつひ
つぐり。龜語れりつとよとり。雲々若徒天香の望居あり

小苑

おさげと

味系此系 松付

味鴨と沖は短はのあまはなり。沖付北つと助語。ま
てつと言ととと集といふ義あり。トフの反ツ。とつて
つといふ二言小なる。これ又同言あまは付此一言は
約めていふ。つとよべて物乃あり。ある事といふなまは
け例よりてつこの詞とんべい

ゆくりと

年ふ

鳥と先をあらそひ物あまあつげり

わぶも系

逢坂山 せに

吾妹子は魚とつけり。其姉とつり。か
の反ギあれはつめていざいもとつり

つぎもこよ あふみの海

つぎもこよ つぎもこよ

来通女等小 相坂山

つぎもこよ つぎもこよ

わぶもこよ 安波治の時 浩浩

是とありはつり。或とありはつり。或とありはつり

少海より 是ぬきくる

けきとたましく。陸よあがは物あまは志りひつ。人北
川をわたり。或とありはつり。或とありはつり。或とありはつり

ありそと ありそと

ありそと ありそと

そらちごと そらちごと

そらちごと そらちごと

低く居て先を高くするをあり

あまろ水 あまろ水

つゝあゝ

い

蘿歴あり。又廿の反ナなまびつるまをといふ後小なり。燕と
つまともいふは古語なり。まふら歴ありく事あるをいひ後
語まびて居るといふ詞はかゝる事とあへべし。たゞこの名は
いふはこれ。居見れおあどつてあはるゝとひなり

やつめさす

い

除つ芽なり。つら脚語。まよつてりて芽本此芽指と。
いづくしとものあまび。いづくは詞ふせしり。いづる活出
の意なり。倍云いづくしとていふるといふ芽あり

小苑一丁

をばつら

い

是もをまつら所とくけしり。イとの反イ。をまつらと後
よまふ蘿なり。ツラの反夕。よつてつとたる。さて今一此
と脚語は一の詞此事と志うりといふ詞をつめていふ詞あり。
やべていへは詞と残りといふる時を。いづくしよてもよく詞
はまゝなり。又まゝもあらんあどいふ事。かく此如く
かく此如くもいづくしとていふる詞となる。
ふるまはし

い

これらまゝいづくしとていふる詞となる。いづくしとていふる

さめて。明白れ發なりちとどの詞おぬふ
あつ流れこそ
いちぢるく

つげのまよは同

いろごふ
いさ

伴香胡ふらまはよなり。是と唯いさいろふといふ。詞は
ひびきとつげと

たもとけり
いあまれさと 播磨

是と躊躇行といふまて。いの一書よけり

とぶらりれ
いさむ

不花

とあついろふとつげと

いろひれ
いさ垣

くざらふら湯をまて。地守天よはれおむといふ。とまこの流
流と。履仲天皇此御弟。黒江中王天下を棄つむとおひしを
大敵よ火つけめよ。天皇と大和れあへ逃おへし。ちるふそは
とゆふ火ををるふしそふませめよ。所言此詞よ。迦藝漏肥
能毛由流伊幣牟良とあり。げつげとくさるひの火此詞
と。とゆるとろしあるなり。ころては流流とまてて火の河と
つげ此神とま。うふ石とつげさるると。即神代紀よ沙石

多と神のふせの息といふほどお笑なり。万葉巻
二よ。神風は伊吹まどろくちかどもゆり。又神代記は
吹探之氣化為神云是風神なり

あぢひられ

味鴨のひきておふら。友とさそひあふものなまじら

かふら。さよふせしり

ちふ葛は ちよとぬま

葛と。くさひありくものおまふ。それなまじら

ちよとぬま

白雲のこく 五百重がくれ

ふら。に。多くかきありける雲をたらくしり

水たまる 池田の阿曾 池田と氏なり

池此はよわけるあり。阿曾と吾兄といふ笑なり。せそ

お通ふ。唯貴ひ詞あり。是と物長の略落しつらさる

既よ神功紀仁徳紀のあ條は多摩伎波流宇地乃

阿曾とあると武内宿禰の事とせり。又万葉巻の中

は。大神の物極極の物たは戯まよさるしり

浪田此阿曾後後の河曾とあり。即内の阿曾とあり

かきくちるちるむ

百ちんび

五十槻

百ちんびみちとつげあり。百ちんびすちみちみち
いふ義あり。まべてみち。いふまねしる。いとみち此路の
名目あるを。すち槻と槻此本乃多くけしる。いふ

百ちんび

幾

よは目。この一言よりいふ

やちんび

出雲

孫雲。いかり。やちんびよち八の字此義よりいふ。唯いふ

小枝下

おひし ちんびなり。いふは活出此をよて。それ勢ひれらり
いふ。あり。亦出雲建といふ人の名よりいふ

孫雲

いふも

さすちんびいふるなり。つげ乃ちよちたあ

やちんび

いふは

彌百土吉齊築乃宮といふはどれつげあり。孫ちんび
少て今云いふちんびと云ふは。孫百出ちんびおひし
といふ。ちんびをよて。孫ちんびといふある。いふ
いふ此詞の例あり。いふ孫百出ちんびと多くいふ

よまにやど

名ふら

いふこれ海 播磨

ふらしとらゆめりことな。名ふらら一とらとらふら今名
ふるといふは同ト

百了ふ

碧余 大和

又十北勢を百よりそへつてふらまきかあつづけら。是も
あへて の海よりけつらむべし

そのふ

石津の杜 大和

ゆらふらあへて建さ人といふ。さてつけら。このいふ

小坂 井

ふらふらとらもやぶらといふ情ありて。まふらつらすこ
さや かり。イチの反イ。こらとら武部北稜威といふ
ゆらつ けら。又つらといふ事らうのゆらちらやぶら字居
といふふら妻一くつら

海

つこの川 山城

本横らあまわらせふ材本あり。さてつけしゆをま
本横はゆるとなうりあもあらず。まぶらまぶらこのいふ
ゆらまのわらうこればあまらあり

さられ志り

さや小入野 山城

籍よ入るとつげり。をカと柄と^つひより^かはれ
とありとひかり

うしとれ 伊勢此神まを云今ひ内

析鈴を析る鈴といひ^{サケ}詞の畧なり。ケルの反ク。えま口の
析るものさ^{サケ}いふ。これら^{サケ}いふの詞をさ^{サケ}ねてつ
けとす

うしとれ 伊勢此神まを云今ひ内

うしとれ 伊勢此神まを云今ひ内
うしとれ 伊勢此神まを云今ひ内
うしとれ 伊勢此神まを云今ひ内

小蛇下七

天雲此 いろちん 大和

天雲此 いろちん 大和
まとおがゆるら^{いろちん}。雷とくは^{いろちん}を
ま^{いろちん}いふち^{いろちん}ら^{いろちん}三^{いろちん}輪^{いろちん}此^{いろちん}あり。雷と号^{いろちん}けた
ま^{いろちん}事^{いろちん}ら^{いろちん}雄^{いろちん}畧^{いろちん}紀^{いろちん}よ^{いろちん}妻^{いろちん}く^{いろちん}ま^{いろちん}と^{いろちん}り

うしとれ 伊勢此神まを云今ひ内

是ら出^{いろちん}水^{いろちん}此^{いろちん}詞^{いろちん}よ^{いろちん}く^{いろちん}る

天雲此 いろちん 大和

集り八牟具良波布伊也之伎屋戸と仮名あり
ゆり。續け此^{いろちん}名^{いろちん}け^{いろちん}ま^{いろちん}く^{いろちん}なり

うの魂

玉此結

うつー心

珠の結と 玉と貫ける結とあまはうらうらとひきまよつてけ
てとふあり。うらうらと心と今云うらり氣なり。是を魂と
ゆくと云ふなり。

たまさるる

字智大和

是を魂と極と真とといふ心此でけあり。イキの反イ。ウノ子の
反回しくイあり。は舞語の事と。いの詔玉さるる今此
あまふしくなり

う

ついでにこれこそ 梅一公

ついでに竹節草よて今の子草草あり。げ花のまろろろひ
やまののやまの梅一の細よとせり。今流草よてけまは名
とろろしとせり。是ら此細をいつてゐるまふ。さてろろし
ふれろろひよとせり

これらおれ 梅一公

紅乃事。あの初あをを此神ら此あまのり。げらもこと
とろろか
とろろか
梅甲姓おを

亦此下九

紅葉一とてへて梅るといへるを。ろろ此かをるにろろ
花ぬる。とろろ。紅も此初とふいとろろよもとろり
を梅とてとろろ。とろろひあま

唐棣花とも事り。紀よと波泥孺の飯名よ事り。
さて萬葉よと夏儲而開有波禰受欠方乃雨打
零者將移香とよととれ。何よまれ春よ夏へろけ
て用ゑるろむ。天武紀。服の色よ。朱花と用ゑられ
事よとれ。まよ赤よ花と見ゆ。げ花いつとれおとと志
まひ。さてつげハ花れろろろを。心乃ろろあまふらよ

詞よかる。今とらうずくまりといふ。今も涙を同く
えり

みよはれ

うちうらよ 大和と云

玉垣の内とづく。うちうらよの助語。即内はふなり。大和は
口言小ふめらりてうらよの國あるはあつり。是を神武
紀大己貴大神大和此ふと号てはまひし御詞あり

ぬえとりは

うらやまをいふ

これと。いふ詞までつけり。ぬえとりは咽啼をい
はし。うらやまをいふもゆゑふうらやまといふけり。

小花冊一

ちぐら

熱臨

うらやま。装あり。是と人のよまふ時と志はびきまは流事あり
繁釧美とつけり。うらやまを珠あり。寢まは
といふら。真と云一言よりの熱聲を添ふるまで此
かり。うらやまをいふ寝入るをいふ

これと云やと

はれ

そは時をいふけり。ちとあり。これこれと樹杪あり。ツク
の反又。うらやまといふ詞よある。本杪又古終。うら
園の涙とつけり。今も本下書あり

ひまらり

雑日 伝法

日此曇り^曇日と^ひつゞけあり。のとなおたきよ

ちんじく

字良^の此^の伝法

波^た須^も酒^も伎^もと^きす^れば。よそそむべし。ちんじく端^た
足^たそ。廣^くらり^らる^る事^をひ^ひす^すべても^もと^とひ^ひ詞^をと^とき^き
見^みゆ^ゆと^とつ^つげ^げの^のな^なら。芒^はの^のう^うら^らと^とつ^つぐ^ぐく^くあり。う^うら^ら
ら^らな^なら^らと^とひ^ひか

ちんじく

抄

つづのつら助語げも多くとつづよとむなれはくつづけ

ちんじく

浦洲の事

い^いら^られ^れと^とあり。ち^ちん^んじ^じく^くち^ちん^んじ^じく^くあ^あど^どつ^つぐ^ぐく^くあり
浦洲^{うらうしゅう}を^をと^とき^きよ^よは^は心^{こころ}女^をと^とひ^ひこ^こと^とを^をふ^ふら^らせ^せし^しり。心^{こころ}と^とひ^ひ
と^とひ^ひら^ら古^こ語^ご。う^うら^らや^やと^とら^ら今^{いま}云^いふ^ふ女^をと^とひ^ひは^はけ^けと^とひ^ひか

うの花

うの花

う^う花^{はな}と^とき^きね^ねと^とひ^ひま^まで^でかり

鴨もれ

浮寐

ど^どモ^モの^の反^{へん}ゾ^ゾ。ぞ^ぞら^らお^おと^とす^す詞^を。う^うら^らて^て鴨^をあ^あど^どと^とひ^ひ

やどれはよる詞あり。け詞をてくしんらるまらりし。
もんでドものこもど多たれども。いあてす詞をてく
いゆ。うさ寐ら憂寐^{うさ}をて。私の中此かるれハ海と
い詞ありをせり又海^{うみ}もてうさ寐と志けるさもあり
わらうま

神代紀よ。海神とてうつとれ神とよまをせり。海を
いする物ある。わらういふつと助後。さそモ千の反
て。持^{もち}といふ詞をつめするあり。よんでいつこおど
まをていふらるり。又神といふ詞をよまをて。いつこ

の世三

とをりまても。海神の事よある例あり。寢らるつこ
此海と神もろよてけいれが。海神此然したまふ海
といふ詞あり。又わらうつこ此か。いふらるともあり

いふらる
魚^{いさな}取^{とり}海^{うみ}とつけり。莫とあといふら古語。いふら
いむらり
いふらり
いふらり
うまべ
うまべ
うまべ
あふこの海。

淡海うすうみよりうらひ。地名ともみえて。いさなとり何れ海
とあり。少もむべし。又あま灘なみもせうけてあり
鳥とり中ちゆうはれし。海うみふらさめて

これら水みづきなり。あまはりて海うみとさるまよせしり
うらむとせし。うちよれきと。未詳

神かみとちとつけしり。又神かみとちりめてしといふことと。
衣きぬらと麻あしはとをもちぬしり。よろしは衣きぬらとといふ。
さて神かみら衣きぬの子こあまをばとせしといふ。別集申わかあつまうは
神かみの字なづとちりてとよませしり

小註冊四

おんまひん

ねびのやま 畝あし火ひ山やま 大和

おと飾かざりまるたよとさかり。あまをと頭あたま懸かるといふことと
つけしり。ナカケの反さか子こ。うらてうねとやる。
交まじ麻あしひく

是こゝらうあしりか洞ほらまてくまひり。うあらし畝あしなり。うねと
麻あしの生なある所ところ。麻あしら交まじひくともあまのあまのあまのしり。け
ぬらうねの洞ほらまててつくともあま
あつそひく。うまぶしまけし

つけれえよまひり。うあぶしり。神代紀かみよりのきは頭あたま傾かたむれ字なづ

と用ひたり。別字をこれとてくちうくふく事なり。
又まけれ詞をたぐゆるまをせたり。二ヶの反世とせり。
ふつてうまうせといふをせたり。又悟れを頭中伏也。
十カノ反ナあり

ちまやぶる

宇治山城

ちまやぶるの稜威早振のいの詞をまをせていふなり。
ちまやぶると。悪きあるまじといふ詞ある也。いふを後
威とくする詞ありと要し。又いふまやぶるといふもいふや
ふあり。稜威とまをすといふ。早振をまをすといふ。

小蛇世五

うま宇治とくけするを。宇治と後威とてをまをす
くお通ふ。それあるを称述記よ宇治方夜伎ともいふ。
又ちまやぶると濁りて唱ふを。千磐破とまをす飯
名よありといふ

ちまや人

宇治

是らよまといふ宇治方夜伎の詞とて下よあり

まのぬれ

宇治川

まのぬれ後威といふまをすといふ

まのぬれ

八十宇治川

たきつつけあう八十此詞をよみて満ちり。八十とあはれ多
きといふ詞まで。是よつけ終よつけ遊三人此後感
あるといふ。又八十うち人とつづけけるも多くの遊
人とよみあがり

この歌

うちそと

麻績王

これら續此詞までくちり。今と是と續といふ。天
麻と續といふ心のつけけり。王と天武此皇太子あり
うちそと

つつけよと回。パ。と助語。又爰此麻績のちり
と。とととも氏とも見えぬ。ありさぬ此實の子等と對
ふよ免る句まで。峰麻と績女とさうてりるなり
うちそと

と

とら麻なり。さくらら地名。それ麻の出所とせむ。小
麻の名とせむ。又さくらら夢生少て詞とくさぬらると
見ても安ゆ。生れ事と。漢あさ芽生あさ蓬生あさなどりもそれ
生立所なり。神武紀は阿波赴とらも即西あ生
まで粟あけけり。夢生又是も同。

そのふれ
りけふらつていふてりものなまは男は蘇我とい
まふらふ
い蘇我事といの歌妹はあより。ととめら少女たり

まむつく
まむつく

まむと付る結とつけり。廣くその一をよひてむ
一

まむつく
まむつく
まむつく

まむらふまむらふ。是とまむ小付結とつけく。まむらと彼
方なり。又まむらふまむらふもつけり

まむらの
まむらの

まむと貴あ當ある緒とつけり。是も一まむ小廣くか
べ

まべて舞語と。唱と回し事をも。飯名遠へハフ
けず

かの神

ひさうこれ

あめれが具心

舞語此事と。あれ神あめの所よるくとり。さうて
是とかれ神よ出をり。つとれ意ふよるなり。又天
乃神と書らせり。其事と。古事記日本記に書ふ。
香かぐふよるなり。神代此事と天れ上のり。まじりハ
まべて何ゆめを天れ神と書らせり。又舞かぐ集
れ事小と。天れ神と書らせり。又書かぐふと。
れ事よめる事も侍り。うと記てん事。天れ神と唯伝

か

三ノカ此四言及一ノカ乃一言となす。うり
て。直ニ加具山といふ河と成るあり。つけ此言を是も天
よりとぞりつく神といふ義なり

むろろろ

無

むろろろ女此髪髪の飾あり。ける物なきハ志うつぐく。
さて無此河を言々無ておのひ。言よりけていふとく
河との河なり

また

つけ

これもつけと成る乃つけあり。無此河の意と目一

うひまの

つけ

うろろ考よて楮此類。いふ人々楮此皮をりて衣とす。
領中々衣女此うろろ物と云えり。これもつけ此
心よと目一

むろろ

無

うろろ無といふつけなり。よびて清濁此言とた
無りてつる物あり

また

無

またうろろ真澄鏡あり。ますろろもつり。と

その詞をよ。鏡をうけて見るのまればあつげり
あつげり

舞踏といはれいやうにふり。環たまに敷き
あるあま敷に河まつげり

こゝろをた くる

是を神れくるとはなつげり。ほゆるれくると
ふせり

物なれ くる

宿をたおしてあつげり。物なれあつげり

若とよあり

若くやに かい

くやとらぬあり。かいとらぬあり。事なればけの
念うくことえし

朝あさすま びや

麻あし火びやを麻をたると火を焼す。まありち麻れ
骨はあごと焼とり。まてつげり。ことびと河のひ
こととらぬとらまをあり。ことびとおあり

解と人あれ 楓あ枝え

夕づらと大白星なり。とていふりめぐる星あきハ。志うつぐ
キなり。うゆさかくゆささ彼正新行かゆさきといふ詞あり。
こふらうゆさ此詞はこふけてこふべし

延豆ひんまめ此

うら海老君と

延豆の事ひんまめ海老あり福と。海は色は淡うすくよより豆の
うらまるとうめる奇ようせてんるよ。豌豆まめをいれり
よやあらん。是は和名乃良ら未女みよとあれバそふお
進しん。赤菰豆あかまめといふものも。籾やいば上の豆とあれバ。是よ
クも傳らん。何よまれ。うらまると詞をうらして。志うつ

小菰四十四

まどふ慈人ようせたり

ぬえとら此

行慈ぎんつま

ぬえとら此とくういひゆるいけいり。ひきむむしす
くまのこもむて。ひらうくくまのこもむむもあひむなり。
うくくはむねひこふはふふせたり。ひまの男あひ
うは詞あり

ぬえいそ貝ご此

信慈しん

ぬえとら此とくおむくさういひあるのたまれハ。
うくくはむねひこふはふふせたり

靈福神なり。福をさちまひとも。さたひともりみら
さちの「ま」といふて。さちまひといふはさちなり。千八の反
千まで。別さちとある。たまた神靈よ。人よさちまひ
ありしむる神といふつけなり

ちまやぶる

神

ちまやぶる此詞をら此初字後の初より。又神と
つらふら。は古大神神よさちまひもさち。さればち
みらちまやぶりしむる此神と。さちまひくつつけ
てりるあり

神代記

ちまやぶる

念持之語 龍家

ちまやぶる神の「ま」言を下略して。まぐよ神此「ま」言
よけしり。必もかの言は「ま」けしりといふもさち。後
加茂。香椎の言あといふ。けしるもいふなり

ほくろまひ

かやく神

神代記よ螢火光神の「ま」と。ほくろまひのかやくかやく
まのませしるらまひ。まのますといふは此神よよりてさち
かす。まのまの威まよしとて。かまらるる強神といふ
詞あり。まのまといふは強神あり

三緒つく

鹿脊山 山陰

三法を神社あり。三諸は齋神といふつげの神あり。爰
を神此の言を下畧してがの一云よくけしり。三法つく
のつくを別とまる小同し。よつて三諸つくを神といふ細
此縁原とあるべし。又冠者考よる。初よこの字と天此
字よミカ也。天法の二字をありりとよませせてありつこと
いふ縁語とす。甚故き。なる人あつてな
いふべし。 くみあび 大和
こころを神の詞とへし。あびといふ詞よつてす。

あびと並なり。びとことお通ふ。又神あびれ三法と
るはあびと並なり。

うまさけを

うまあび山 大和

美酒を醸とづく。醸しを酒とつくる事なり。是の

反こたあり

まの葛りふ

春日 大和

唯そのまひ一雨をいふ

朝日指

春日山 大和

春日れ山と東よありて。旭の山を満てかまよはし

此の海あれば。うくつげり

處この

かまがれ里大和

うすこかまがの河をうき給り

ちる目此

うすが大和

善目善目の處むとつげしるあり。喜びと濁る處うらじ。

武烈紀は播磨比とすり

善ひを

かまが大和

これとちる目を處むむといふるよつげしるあり

吾妹よ

衣うすが春日大和

是ら夜の河を滿て。備といふ河よとせり

つぎと此こ

うりある命

つぎと此事うの初うらしむ此雨といふ。けま此死乃

まをやくらうらふおなまは。彼ある言よけり

天おや

うは

鴨は煩うら驚おどといふおあり。俗云黒鴨あり。程うら此地名同

語るは志うつげしる。お天おとるくおといふ

かり。又かると鷹たかといふもうり

あまむ

うは

多たれがふちりといひけしものあり。萬葉
家鳥と書るふつそ。つくづくとむむとくうし。つく
づくといふ仮名書き

たふとり

鴨

そは假名をそつげり

たふとり

鴨々まむむ

鴨々まむむりまむりまむりあまむり

とほつひとの

村道の池

これら鴨といふ細りくけり。よな回

五

つらつら

うらたれ池

弱薦と新とたこのつげやう

おほとり

葛飾

おほとりとく水をつくおろきバ。うら池りよ

せつり

たふとり

うらたれ池

伸津藤と流れ底はあつたれハ。うられとつげ

り。け地名伊勢地方よりあり

大船

うらたれ池

これらとて楳取とつづけけるれをかり

玉藻笏

辛若此島 掃磨

是とくるとかられひびきとつづけける

なまよふとれ

甲斐

生弓反るとりひびきふうせりいあへれらと皆
本あり。又及れりいと今もうるとりひびきとよとお通
ひびとべとお通ふをよ志うつづけける

玉藻笏

かろりかろり

玉藻ハ流よあつひるものあれハ妹あどのうよと

ひびかろりかくろりハ。被方もあり。此方もあるといふやどれ
詞あり。又いれ語よとより一痛一妹も。あびき我寝いよも
ふめらあり

花うら

うてもあらぬ

花うらと花のさく菫あり。あつまきと花はて。もハ早縮の
花の如し。是と田字藻此ことなりとりひびあハまうら。
さてつづけのまら。うら詞とかきひるはこあり。うらてハま
てといふあどれあされハ。人志うらぬことよあつひるあり

この部

あふみさげ

君が面

これら朱刺君とくさるをほめる詞にづけたり。祝

詞は赤丹總は聞食やど稱することをふ回し

さふづらふ

君

こゝにもうぬら記君とづけたり。さふづらふ此事いの

初妹といふ所より

さすしけれ

君

さすし河を枝をたさるゆりといふ。雄畧紀より

15

五十一

根の根ねのね足あし宮みやとあることごとく。さす竹のさるゆらふことごとく
て君をいもひするつげなり

あさもろうー こと

麻裳あさむら吉きち着きふりといふほどの意よつげなり。古くは
質ちか素そよて。弟あにづ花はな廉れんよつねバ。うーとほめ登のぼる河がもろ
るなり。又麻裳あさむら此事このことの意い同どうれてとあるとあるなり
よ。ひささ麻あさと裳むらふと織オリるてあるともあり。は
語ことばもぶてこれ一ひとまようゆとあるべー
さぬつげり こと

五

さぬと小形こがたつと物語ものごとさぬと古語ふるごあり。今いまも
ほとつ。これを形かたちますむるればあつげなり。又
され河がともあり。ぬつともあり。又狭野津せやくしづ

まそくみのこ こと

はき殿とのおともつげなり。さうく笑わらゆ
むぐらふれ こと
岸しづ生なれ禪宿ぜんじやくなり。さうかると守足しゆそくと
ふなり

みあひふ

あはべのま 大和

是とべの言まをりゆ。まけを供濟あり。さうを酒此
古語なりべら瓶よて酒器なり。家あを高市の皇

子と葬奉りし不

吾妹子と

聞都賀の腫へ 拾け

是らとの詞よふ。あれい。わごもこといふと聞と。
いをいを加へてるあり。ヲイカニトの五言反して
その一言とある

敷あり

さうこがさけ 肥茶

五三

これらうしきとつげとちとたきしく。さうはけつりふハ。
くしとまをりていなり。さうメキの反りてさうめ
さうとまをりていなり。さうメキの反りてさうめ

是と此の歌衣此の歌よき
あつて此の歌よき

よき歌衣

あつて此の歌よき

あつて此の歌よき
あつて此の歌よき

あつて此の歌よき

あつて此の歌よき

あつて此の歌よき

へびてたり

あつて此の歌よき

あつて此の歌よき

あつて此の歌よき

あつて此の歌よき

あつて此の歌よき

あつて此の歌よき

あつて此の歌よき

あつて此の歌よき

あつて此の歌よき

ちれはゆるきとひりけりふねは河おをふ
ま草を 主玄ヤキ 馬山 山台山城

馬といふ河と屋とつつけり

はしそれ 倉橋山 ち和

ちりたてら今此様みさてけり倉橋山此峻さ
と。楷立ようとてふあり。仁徳紀よ倉橋山とある
家二そあうら。さぐり事ふあり。紀よら破始多
氏能佐餓始 積 とつつけり
ちりそれ 熊本 徳宅

け熊本といふも山甲まで。峻き新なりはけ
流よそふあり

さしすこれ 栗栖 大和

ち五姑持さしすことら。くらめを法うけて。系を
くり物とものある。指雲は縁雲といふ
ゆとあつつけり

ちりやひく 弟番此山 山和泉のこひあり

ちねら草とつつけり

さくあこれ 國津御神

依く奈美と。進いませ。廣き地有ありしに。是
比良大社のうきまをもうけて。いさか鏡をさめり。
さぐと濁るべからず。紀ある校くと事記ま佐々
と事。万葉ふら左殿と事。今西を以て左奈美
といふ所のまらと古名此然りするより。相
は神とつづく。まら。たぐ。並此。由よま。まら。神
あは。あ。う。り。の。あ。へ。と。ま。ま。て。廣き地と。ま
とり。ま。倒と。ま。ら。せ。小。心。或と。ま。ら。く。ま。と。あ
れ。ま。ま。り

まら

新 稲田 娘

美髪と別馬髪なり。是れ髪よ觸れる指とつげり。
奇稲田娘とてまら名やまら提ひせめ是名提此娘なり

百海をわらかり。クタの反力。はつげの事とらうの
初から此下より

まら

久米 人の名

久米とつげたる。総の名なり。雄畧記は伊久
美陀氣とまら。入組所なり。縁終れりまらうの

朝霜北 けの部

朝霜北

けの部

けあばけあまく

これを清ゆらおあまづいえいとかり。キエの反ケ。ニク
の反ムなり。けあまくらまえあむとらみ河のつめ
かり

朝霜北

けあまの令

キエの反ケ。つげうくすゆ

朝霜北

けあけあむく

朝霜北

けあああぬま

け

朝霜北

これと清ぬちなりといふ相あり。ナリの反ニ
つゝこれ けぬべと意也

つゝこれ等の清やとてまだとていふなり。清ぬべと

意らうとえむとする意あり

あさしと此 漸木 筑後

あさし清といふ相とて此のちなるなり

亦
五
九

この部

むらぎと此 むらぎ

群 むらぎ とつげなり。ガリの反ギ。むらがりある。とり

ひらがりなる相なり。さ。ら。こ。ら。相おぬひられハ

志うつげなり

まむむ 心

これ一言よめるに徳紀ナ。まむむまをたなとこ

えなり。肝と別をなり。こられむふまものらまよ志

くず。よりて志うつげくなり。むまよまらうず。こら

こ

いのし言はくちていむべし

うらまびく

ん

んちあしり降ふものあまひあり

いふあはれこく

んさうま

いふあはれを交をおひする子^て贖^{あひ}核なり。さるを人れを

とていむるよりけり。は例をまてり。これ詞もろひ

てういへり

梅

のれ

んひんけ

んひんけとらんけとあり

いんづら

んちんけ

こととあやなりづと物^つ経。くくと松なり。ことづら此

言とらうしてんさうまといふあり

物びん

漕^{くわう}奇^きあり

物びんさうまあしり舟と物とらふ。つけれん

こととえくるまくなり。物びんけと同一とらふ

とらうら

あらしんこれ

夜

鹿^か拷^{こう}衣^い

ぬのい

よそとあつち布衣あり

まゝにありて。是れ如くおぼへらるる。よりの。子良
と云ふはハ女と云ふなり

さの部

けいそれ さいん

是らくの部らうりのあより

あめなる さいらの小池

あめなると云ふは、いづれなり。ニアの反ナ。又あめ
なるやともいふ詞もあり。さうらに小池れり。又さう
なる小池ありといひ、いづれありけむ

あぢむられ さいん

人おさうぐと。けい鴨あぢむられ群むれてさうぐとあよりせり

さきんちよと

さきん

小堀北へさくはまぐとつげんり

ありさぬれさく

さきん

ありさぬれ事ら。あの節。ありてとよみあよりり。さき
さきんちよとさくめ。さきんちよと事ら。さきんちよと
とさきんちよとさきんちよとあり

さきんち

さきん

たまさぬ即ありさぬなり。つぎはさよま回。さき
さきんちよとさきんちよと。ワギの反井なり

あびるま

あびる

馬酔本のさくさくえとつぎさき。別あをさき
常と人よさきなり。あをさくさき日よさき
まら白さきさきなり。事申さきさき
さきさき。又あさきさきさき

あびるま

あびる

あびるま今北遠りあさき。綿りて作る花
とさきさき

あびるま

あびる

たがの浦

いたちをて

たがの浦は出雲あり。是はたがの浦をかさねて
つけと云。たがを定めて。今云とり沙汰此きあり。
定とりやわきまを定める此定めてさういふあり
さういふ

さういふを定めて定めての浦よさういふ。又是とさういふ
ともいふ。さういふを百合なり。神武記の浦此申よ
いゆり此事みえしなり。記すに井の飯名はらふなど。
井と井お通りて申る例も。さういふハ息と枝と

よひ。未^ニ井^ノ角^ヲを未^ニ葦^ノ角^トと申るたがひなり
さういふ

顕宗紀よさういふか此角さういふとあり。是よさういふ
角と此と申す。い河万葉よさういふ。さういふとさういふ
あけてあり。アの反井紀よさういふて舞とつきたり。
さういふけて此河と申るおあさういふてさういふ

玉鉾

里人

焼^キち刀の利とかけしるごとく。鉾の刃は狭く利き
あまれば。狭利の河さういふ。世の反井

なり。吟とあるふまじひて唱聲と名るを基たふり

たまもふり

磯波

是を珠裳吉刺脱少といふ意あり。クニの反キうのく
ぬきとわら。万葉行取義此等の仲よ。柏錦紐丹縫著
刺部重部などもあり。今もうぬきなどいふは。刺の志
の詞と下畧

とあころる

坂手

も此細を坂代とつけたり。ノアの反ナ。よつてトナエ
とわら宿も此あ一ま坂を飛蹴るとあるとなりて捕ら

あれハ。坂といふ詞よつけたり。又での詞をタケの反テ
よて。よべてほとくといふ詞よわら

あころる

坂手

あころるの語とづく詞此あやら。あころる物もこの語と
いふほどの義あり。ナルモノの口言反してノの一言とある。
あころるざれハ。かくむらりよてと語とあころる

くひまは

坂手

たぐむれとかの物うけの取より

あころる

坂手

志まへにゆふ藤とつけしり。さくまは事と。くの初
ふは神神は事よひ

はまこりる

とまは

佐保と大和

爪ごの藤とつけしり。藤とよは梅りともは
あまはあつしり。矢とさとしり別古。又佐保よは初
と付るは。小初瀬とよは初なり

あぶ

さこひはあ

讃岐

名ごうに初といの初いあまは海とよはあつしり
とまへ

さこひはあ

大和

こまへに唯候とつけしり。さくまは事と。くの初
とまへ

たはは

大和

志の部

秋 あき

志 し

是と秋の音目とある詞秋とく。音目と仮字下
 乾此多とて。秋の下葉のつづくるにたり。あま下へる
 とあまへるとひとおまひて同終あり。さて古事記は
 秋の下水男とあるも。清くそとむべと字例ある。志と
 へると濁りて清くす。又万葉は下部留とす。これと
 部此字兩音は別なり。さてあま下物あまのものがらの物と下歴あまのものがらの
 志しよりなり。うらなひるるまのひとあり

志

一面あふふをせつづけり
さぐれ浪のこゝろ

つげよま回ど

いさむらひのこゝろ

寢席あくとつげあうら。藤とよ河りよせり。藤と

志まこも志くともいふ

志まこれ此れ

芝の野乃河よつづけて。屢とらよ家なり。集ふら
司馬の野と云ふれども。寄草哥よわくよめ後ハ地

名よあゝの又立浪の志まくともちり

たまうこま 島熊山 不不洋

かゝ海と河の波あらん此而よみ。まをけつげと玉籠

透間とつげり。スキの反じ。うて志まとわり

あゝこま

栲の衾白とく海。志らと物所あり。さう城あり

たくづぬれ

栲経わり。つあをつぬとつやと古後。栲此はをりて索ら

綱を是ハをこ白一

置蚊火おくりび火び火び火び

トこがねのこ

蚊火と申されハ。室より今云改をり火と云ふ。又
鹿火ともいふは其後字。山田守人の書るわがよ
ろこつれハ。いづれよてもさるわがの火あり。是を烟
らせておこ。ト火は焼たいおられるハ。ゆれ屋よりひ
こがねくよらせたり

さくちあはれ

志賀 せい

これと申すつげさるはとあり。さくちあはれ事らとの
物ふは所林のあより

こらせ川のこく下

こらせ川をうへと水洞たぬで。砂の底をくまゆくあは
れと申すなり。うへとつげさるはとあり。さくちあはれ
よ。よりおみんをさくちあはれなり

よりぬれこく あはれ

ぬれはあり。こらせぬま水も。よとをうれぬまの
なまけつげさる

こらせく

難たがれたがるたが

あはれと鮪たうなり。こらせぬまをさる事なり。さくち

あはしと物せり。見人ましくん。唐うしす。

尾花ちる

志づくの田舎

志づくら下あり。ヅクの反ヅ。あつと志づくら。田舎を
ぬるるといふ。まて尾花ちるらそれあつらけとぬな
まの尾花とす

下捨あ

志づくら

志ハ下の酒とさういふ。ちよのつけあり。下捨ハ。
けのぬちり

志あへる君

志あへる君

志ら志あへるといふ。酒と志あへるの酒はけち。ぬくさく
何おまふ

志らすけ

志らすけ

志らすけら菅の二種。つけハ志らすけ酒と志あへる

中であり

くりと志あへる

志あへる

志あへる志あへる。刈荒の志あへる。志あへる。志あへる
志あへる

むの部

須加の山

むらさく

須加此山を穢申はあり。つげをむらさく此詞をかきぬ
しるむらさくあり。さてむらさくく。須可奈久と字
たきハ。むらさくと濁りてむらさく。せんく。むらさくと
とつめくる詞なり。セニの反ス。カタの反カ

むらさく

むらさく

ありむらさくの事々。あのむらさくむらさくありなり。
らのとつと本末といハ。むらさくつげなり

むら

よそでござぬとある

ゆくふれこく

まきこ

新川れこく

色あし人

新川のこく

遺行

新あれこく

遺あし妹

つけぬ心よま回しく。皆えりしくみよ

あせやこく
まきこ
まきこ

伏屋焼煤といふ義なり。伏屋とあるは家おなり。
まきこあせやのこ。焼火は煤にけくこくおなり。
まきこ此詞までよくけこり。まきこしとすみあり。スミ
の反し。まきこまきこ一云と踊てすこくとある

いもれ事とあれ新ありまきこよこり。まきこま
まきこあせやのこ
味鴨此例とつけこり
味
の
諸
海
の
入
に
紀
の
國

その部

さげ竹はこく

そぐひ

さき竹と割竹は異なる。竹を割るは後向^{うしろむき}にある
あよ。そぐひは切はつげこり。そぐひは背向^{そぐひ}なり。
こくこり。さき竹のそぐひは寝^ねて今一悔^{いまい}とさ
とよまたさる。割る竹の後合せはかきまうりませ
ころあらん

やまをけは

そぐひ

山^{やま}菅^{せけ}の麻^{あし}と。それ一まうり。菅^{せけ}麻^{あし}とちまうりは
そ

神代。いみへら菅とさきそ糸もせりあり。麻比詞
と有ていふ。今菅いとち糸比細き物といひ。又
是とよぶとも唱ふほど。それら下へふとつぐくる者後
かり。こころよやまどけとあるは。須氣と本る飯名
ふふまひり

まどけうー

そがの川糸 ち和

是もその一云ようは。ま菅をうーといひあり。さては
麻比といふほどは。けあり

まどけうー

そがの川糸

そがら蘇我氏あり。蘇我のそがら。蘇我氏といひ
して。真比一云とらへく。これをまこと此る蘇よ。
ける蘇比子等といはんがごとく。け例をよて人の
氏あり。小まの詞とつげよむべー

まどけうーの事々この初ころも此西より

秋つねれ

神振妹

情吟ねれごとく。うすさ夜比といふ詞を。唯の、一云よ
こめて。まよ神とらうーとら。ノコトクウスキコロモノ

とりよ十一言反一々ノの一言とある。神振と妹が
そそひひとひ

そめゆれ 一々 一々

ゆめら帯あり。帯と又あやもほるおちれハ志うふ

へう流 一 一

へう畔わり。つと物流。尾よりう流とひ。そと破あり。

志うるを其といふことなふよせたり

うまひれ

そとめぞ日れハ

片襦ら。おとある器あり。うらハ此度とつけあがら。そと

あぞ日れら。いりあやまひあはれハ。人志あやまひは
うあひまひあやまひ

たの部

あまらぬれこく

たゆこみ

たゆこみたるこくふなり

ちねれこく

たゆこみ

こね勢川

たゆこみ

是とあれふるこくあまを。人の中へえびとすなり。
ふせこり

ちりこねれこく

あくられに良

ありこねら臨まじり。實を貴明玉はつめなり。

た

又ありさぬら申し珠をれは愛此細うつけあうら。是ら子等と愛
て。ありさぬれごころ家此ふ等ありとらるなり

馬トとれ

まてつまうく

つげのまゝとえり。は細と人れあびるまうがまあ
とり。トとのれ事ら。うの物うづるのあよりり

子物

格

いあへと格宥有り。まあをうりまをそ厚らあま

これ多結ま又ま枕田子とづくも結の細の下畧あり

細解ぬ

格

是もさうらよま回トく。格よら。この丸を麻を志くると
そまふ多結とせり

あらしとれ

たをと

つげの心多うたす。手織らよすくとりあ義
カこの反キ

あらしとれ

たをと

あらしとれと脚をとりあま。たりととらちまを
痛らまのあまうくつけり。被らよ中とりあ義なり
玉の結れこく
くえト

あらことよは敷り榮る時あはれけは海濱よりかきり
むらむらぬこゝ

たゆらことあゝ
あつたつたのふ。別ふらふら実生うら道あり

とち舟れこゝ
たきる面あ

とちつとと十五夜舟れ舟。是を舟ちつとつた。目と對
して拵合する夜よりいふ。是を舟ちつと欠く事あり
なり。面輪あしのまを先づりといふ約。是を船れとあひ
くらよここへたり

とち舟れこゝ
たぐり

是を備りしと事くらよ。くらりと付てくらよせしと
とも。十五かろ月つき之多田波思とある事ありあつた
たぐりともむかり。たぐりとも備くら湛たつたよ。舟る
事あり事よなるあり

とち舟れこゝ
たのめる

とち舟れ舟も被あと。是ひらよたのむおわさハ
あつたけり

とち舟れこゝ
おひたのむ

これもおひらつた御さつとつたおわさ

長雲此こく

雲がまうゆ

これらまうあくとりまをせうけいり。志うれとと雲
らこゆともいふ。まともりもくべー。又あると
もつぐべー

まやこぬれこく 立あえぬる

こまこまきぬれこく心づいて。立あえぬる
いふはあつてけり

能田山

立あえぬる

是らこくといふ細とを福てつげいふはこり

五百重浪のこく

立てもぬる

とこよりの

このまらた

常世といふハ。常世のこをこくまうのひまら海龍神乃

宮とて常世とよめる所あり。さきく岳仁紀又多遲摩

毛利常世又いふこく登岐自玖能迦玖能木實

持参上といふ。まらこをまらるといふも多遲摩守が

けさより乃義なり

白雲此

能田此山大和

水多此こく

立むらそひ

立む將^し糺^せ米^いと糺^いの^いを^いほひなり。水^み多^たと。立^たを
れさ^れこ^こぐ^ぐし^し物^ぶを^をれ^れば。ある^あが^が申^まふ^ふと。水^み多^たよ^よこ^こへ^へて
糺^し立^たれ^れと^とわ^わげ^げし^しと^とり

あもれ こそ 立のいそぎ

是も云とよ回

ころごとれ こそ たちれさわげ

是^こら^のる^るる^るこ^これ^れ河^かを^をて。立^た鴨^鴨を^をた^たち^ちこ^こも^もと^とある

わりカコと回

あもれ こそ ありろこ

芦^ある^るよ^よ竹^{たけ}居^いる^るた^たづ^づあ^あま^まい^いあ^あら^らの^のふ。い^いづ^づら^ら糺^しれ^れ一^一名^名。い^いづ^づら^ら
と^と是^是長^ちく^くて。あ^あゆ^ゆむ^むた^たど^どく^くし^しも^もな^なま^まい^い。人^にれ^れ
つ^つな^なり^りよ^よ。あ^あま^まい^いな^なげ^げは^は河^かを^を満^みて^てあ^あら^らつ^つげ^げ
し^しり。た^たづ^づと^とい^いふ^ふ河^かを^をた^たづ^づら^らなり。ド^ドル^ルの^の反^{はん}ツ^ツなり。た^た
ど^どら^ら則^{すなは}ち^ちづ^づぬ^ぬる^るなり。ツ^ツヌ^ヌル^ルの^の反^{はん}ツ^ツ

天^{あま}云^いれ こそ たこも志らげ

た^たど^どら^ら手^た附^づあ^あて。よ^よ寄^よと^と回^へ河^かなり。天^{あま}云^いれ

よ^よら^らく^くい^いる^るよ^よ芽^めれ^れい^いづ^づら^らあ^あら^らせ^せし^しり

あもれ こそ たくめよ君と

直目は君とといふ義なり。或は俗に直あり

まゝさづきののこく たくさあざり

正木葛はごころ。手抱糾もふといふ義なり。男

女はね麻一さぬといふ。正木葛は。その義は正木といふ

ものよ回し。杖は赤き実ある。とぞより。常葉木

よてまひまゝふ蘿なり

まゝ花れこく しみとくむ

むつてをすりおそ。ふとくといふ。集申酒と漬るおよ。ふとくおと酒やあやしはこくひなり。まゝ花れ

たぐひあるおまればまづつけーなり

まゆづきののこく しみとくむ

治弦絶は續むとてくわり。治弦と設弓弦は義。

用をよし。弦といふ。ちさうれは治て又をけんといふなり

らやこり

石走 たぐい

伊波婆之流とまされハ。ちるとすてふむべう

ど。又流と多伎ともまする所あれど。たごるといふ

を此河あるハ。多藝とくける方よつて右のふ

小とほあり。つげのさかきとていふなり
いさごうは 新水 杉井

たもろと踏なり。新撰姓氏録よいまく。孝元の所
代よ。ひざりせし時。阿利真比公高榎と遊りて。あ
と阿方比ふよりたふれうりへとら志めふより。その功
をよむ。新水の姓とてまひ新水の神社とつゝさざり
しむ。うて新水名もあつていふなり。うら新水の名を
いひあざら。新のまよ新水とつり
うらたどり あむの山 ち和

うらたどりたまむと。新のひびとてさうあなり。タワの
反夕。うてたむとある。ふれたるも。まひくさくあなり。
今いふとて多武比名といふ
うらたどり 竹田の原 ち和

うら新水は新水。さかきひらさるる事といふ。今も
さかきひらさるる事といふ。あらむとて新水のこころ。
是と唯あはれ新水といふ。うら新水とあはれ。さかき
新水とあはれ。うら新水とあはれ。さかき
新水

高野の溪 和泉

大伴の建とつげり。たげたり同語。大伴氏此先
 祀。大久米系此命也。建とつげり。卷此
 二十。於保久米能麻須良多祁乎などもあり
 くらつてく たがいのさき 志摩
 鋤の臂よりける玉はさりなまハ。此節といふこと
 ちふつげり 田上山 志
 ころもてれ 志摩系
 是をよといふ詞よりつげり。てたの詞おをふ
 家よと 志摩系

これを神とたがるとつげり。たくだり同語
 ころもつら 志摩系

菟枕のさるをさきふつげり。まぐてさるを詞より
 けてふむへ。神樂なる言漸此後。信和紀より
 及むまひ此神社など。いづれもさるはくは此後語
 あり

ままらと此 たゆひが浦 坂か
 彼らとと正男あり。たゆひと今云小手なり にて
 ゆあつと たひけの山 地名ありいづこも

こころこころいふ詞と。今をたててあて唯あがめていふ
こころをなかり

初花のこころ

散るまおと

散るまおと。ちりなんおととよほど此詞なり。
初花とていふ海へおとれハ。あつれぬちよるあんな
どいふ此花もこころなり

玉の輝

道

玉の輝。此千足といふ詞とこれ一を満てうけり。
初花の國はあま妻いこく云

たぐあハれこころ

千尋めもかこ

露のこころとあのかもこれあなり。こころちりあど
此花とていふ言よつけり。かの一を満ていふ此詞あり

浅茅系

茅生

浅茅系。茅生に足踏といふ詞あり。茅と今も
芝草あり。深くぬおゆき。浅の詞をよせり。
茅花抜浅茅が系あまよめるああり。さて家此で
けり。唯ちれこころとあまよひしはあり

くろいがこ

ちりる國

六しとほめる詞。ちとちと多く足持とといふ。皇朝
 としとより武ある事。志く國此名とす。神武紀
 曰伊弉諾尊目此國曰日本者浦安國細戈千
 足國云云細牙とほそむことよむむらこあし。重牙
 細牙とをよ牙とほめる詞なり。けし先ハ倭一必乃
 名あり〜かど。後々王化の及ぶよ志さぐひて。けほの
 惠名とぬきり
 秋風此 千江の浦輪 をい
 是と秋風のころとつづけあり。夕千の反千

つゝの部

まゝ記つゝの〜 つぎそゆれハ

後語とたの記〜まわさつり此あよ云。是と葛此と
 く人よ志〜ひゆ〜またとよ。ゆけま此ケレの反ケ
 よて。あゆけつ〜つゝあり

淡茅系 淡茅系 淡茅系

葉系此ひぐさをつづらとらう〜つづけ〜ら。つバ
 らら此葉よてめ白なる葉とよ

楫の臺此 つづら〜よ

つ

今あよめと入音をづらうといふ。わうーらつとや
ひけむくづけなり

あらたまれ

月

是らあらたまれとつてこそ。月を月くよあらと
まらぬあまふといふ。さてあらたまる物といふ詞と。
二の反ム。ムモの反モなり。よろであらうといふ詞と
いふ詞もある。從来も月も改まるあまははけなり
つげの言とあらべし。あらたまれ月日あるもよあり
ぬをぬれ

月

是らぬをぬれといふ。ぬれ月とつてく詞を。あひと
こよつてめくるなり。ノコトキヨノ六言反しそ
ノの一言となる。ぬれ月事といの部。ぬれ

性^ヤぬれ

月

月れゆくぬれといふと。よらよーそつげとす

鳥の凡

統紫

凡^{ツク}衝といふつげれをなり。統紫と付^{ツク}ゆれ下^マ界。
ふよまぬれざれいふなり。又つてくーまれ

中畧とも

志々ぬひ

菟紫

是れ火つくとつゞきなり。京師紀は天皇菟紫此
海と渡り多し時。海より火れんえいといふなる火と
さしせめんハ志々ぬひ人なり。菟紫ハ一人の火よあら
ざることを志りたり。是れより志々ぬ火とをいひつゝ
さくそふら菟紫八代縣を村なり。は菟紫を飯字と
よそぞれも言ふなり。是れより火付とつけし語れ
あやまるを後ハ理りもやくの詞をいねていひしなり。

捕

矢拔

菟紫

火付ハ古語。火れ付とも。火をつくるとも。いんを後漢
なり。とては倭勢物語はさへ火けんすれハとあり
是れ靱又指さる捕矢と。拔ははくとつけしなり。捕
とさちといふハ。神代紀は見えしなり。さちハ章の
義をて捕とすれハ地物の名と章ハ義は取さるなり
万葉より。捕とさちといふあり

菟心

菟紫

心々しとつけしなり

とつふ

解麻 紙お

とつふとあへて百此好のせうとん。いかにまじくもはうふあられハ。家ハ蘿とくけり。つゝあは蘿此古傳。薙乃りつこまをもまひつふよ。け終を
おたり。つぬら。又力の反十を即つるなり。今つぬがを敷 賀といふ

さつふもれ

とづくを 常陸

校衣の徳付と。小龍波此詞よとせり。又龍波にこの一言とあてり。小新田小初濃の龍あり

あひむり

龍波

をりら田畑を耕ふと事あり。龍波此詞よりとをやくひけらるゆゑよ。そはまては新治此詞よつげし事なり。今と新治を新の者とい

龍波

つくを此山

いさもつて其あるをといひつげし事なり

あまてら

はくま まね

あまてらとかの龍とさる此ありなり。龍摩も山坂などまててけ終はまけり

あり縁あり

つま

荒峯吉對馬とつげあり。ありねら荒峯なり。ラ

キの反り。うてありねとある。古事記雄略條よ阿

理表とあり。即荒峯なり。是と吉とほひつら對

馬と奇山多々ねなり

つがの本れ

つま

今いふ梅の本なり。つげれきなり。つがつぎといふ

さねねあり

つま

つま

つらさを免す。抱きこむ。はまこつげあり。是ら

海くさ

つま

枕付らまぬれ枕付寄なり。つま座を寐るるれハ

志うけけり

あせ屋

つま

伏屋とこまよねれつまあり

抱きこむなり。さし妻回ひとつねあり

とひら男女おこらなり

うらせこ此

常

うらせこ乃事々。いの教いもの事よりの常々別

石松此 いそまつ 子

子

松もうらぬ物あまふとく

萱此

つらの同也

つらら つがね たり。萱も萱此。ひらつぬのる此種

よらせつてけり

大船此

はらり ばらら成り

夏州此

露分夜

是々衣此名よあらず。唯露を分 よけ 夜をとりく
よつてけらあり

ひものせれどく

よらりあひて

細枝の付合ふ男女此るをたえしういハ打あて打付 うちつけ
会 あひ たりカリの反キ

まらすつら

何のつてこと

まらすつらありく物あつての物よけら つて 今もい

ての部

まそくみのく

照

まそ鏡れりらうの部うけておあよひり。照るそ
新乃きりをりよ

て

小苑下

との部

あつたまは

年

あつたまは 改めとつげり。つの部月此下より

あつたまは

又年

是らいつの初と満て。年よつげり

風の事此

吾妹

と云ふもむらぬむらぬむらぬあり。風乃事

乃と月系ふせくるの事あり

雲辭也

家方

小苑百

うり竹此こゝ

とぞ

打竹と申すはねと。是は仮字まで空竹なり。竹乃と
とあるを。女竹とのさめよとせしり

なぶらされこゝ 一 とやなぶらりありて

なぶららねの義。さる葉なり

ます竹此

とや舎人とこ

是はとねとひ細まう中より。松が根此まう久
しくとつげらるてく。ます竹のまう根まうゆり
けて。ま根と。とねの根まうせしり

小苑百三

つらさちカのこゝ

とぞこゝ

つらさちカといふは。古事記は都牟刈之太カとある
け詞乃ととれる。つじぐりらとかりらるこゝとよふちカ
ら物と断切るあるまういふ。まう磨ぐ物あるまういふ
まういふとせしり

まういふ此

とこ

志まうへの事。この節りへの事。まういふ

まういふ

床のへさし

是も磨乃意まで。とは一言りまういふ。床はへの

意ら即之しと少くすくある物らをさしむとみ
あかり

いしがふと

とろしれ活 和泉

いさしと妹ごふとさりとつげけるなり。ロシの反リなり

いめとて

跡見 大和

いめと射部此者^のまて。猪の射此射^い人なり。めとべと
おふふ。さて又^いいんと。けいのゆえに^いい見さむ
射^いなり。とて射人をまかす。あしと見えゆくあ
ふけあり

うらゆらふ

池見

うらひゆらふなり。池見とよふたきド

あらしむれ

とハハ 池見 大和

いさしとあらしむれおとく。とぶとバ詞たき。さて
大和よてふめるなかり。大和乃地名なり。とべとねど。
同名とあらしむけても。とそ大詞のつげれ。乃
事あり。山城の事射も。とそ射もあらしむる詞は
とらげてもいへ

ほらきす

とらけれ浦 西石洋

これこそがとつげさり

阿比比まぬ

取碧川 古和

あはひまぬを今に洗濯せしなむを。せり入ると
つげさり

やまたちを

さあこれ開 敏中

これをとれ一とよくけて。やまたちをととくとよく
けさり

たきつ流

ととむ眉引

ととむと志あへるしとまれハ。流れは^{たうひく}流あつてけて。

小龍百六

^書ける眉れしとせらるふらうせしり。まよととむら。麻

欲比伎とまらよらる

おひむりれ

ととむの流海

流海とつのは流海の下より。多むらと常陸れ地
名。はあはらしよくひらけしあり。は流海をた
かり。流海と流あり

棒弓

引豊國 多景をぬ

棒をてつとまらる。引たたませると^引引たたませると
する詞のむとつげさす

ゆく水た

と記ともなく

是らいつと時ともなく。常々といふつひあり

いとあらず

と記ハ

と記をハ常盤と記ハの義あれともうハ。喜み此後ハなりや
まーといふむとらけくるゆあれハ。常盤と記ハ本と記ハ事よ
とあるあり。そをよいとあらずと記後悟とおけり

あゝの部

ゆきくされ

中

さういふさう百合ハ。これが枝らと念よて三つよさうさ物
あまふ。あまふ二枝ともまり。又三つあるものと申あれ
ハ。さういふさう

三つ粟れ

中

これら粟の實のこつともさういふさう

あまふさう

あまふさう

あまふさうと奥津と記ハ藻よさういふさう

な

おぼとりれし

あらさひ

なづきひと。あらさひなりませ。つめてら馴積といふ事あり。
おれとこやりよるをいふ。さて馴積と云ふ。こ廿の反。こ
二ハリの反。まうてわつことなる。鵬鷗乃流よあらさひ
ゆきよ。男女れまごひまらむをたごころり
まどとれし

あらさひ

あらさひとりませも。うら友よあらさひゆくおまれハ
かり。つづけれをよ回ト

ひくわれし

あらさひむむと

かりさひらありこなり。引細をくくへひささふす家
そのまれハ。意海はあらさひをよまたとふ

馬志とれ

繩とりつけ

いもとさす詞。さあどれこく繩とりつけと
つづけり。是ら縛繩よて石とて磨をいまめ
るあよふあり

志やふれし

あらさひ

志月ふねと別海船あり。いづれあらさひとつ詞
あてぬよらるる

事少也こそらり名とよこつてくべ

つるぎたち

名れとけい

こぐみは

名

舟も古くはこくく名をつけてふり。今もま

志あり。ふつて名れ一云ふうは

名乗藻此

名れ若らうとま

繩海苔此

名れそも若らうト

此二つは若らう。若らうは海苔とわけてふり。若らうと
はるといふは古名。又名乗藻と名乗藻は時人号

濱藻謂奈能利曾毛 集仲よりわたりそとわたりあ

り。是と神馬艸とさる。莫乗曾といふもあてなる

字なり又繩海苔といふはいづれ海苔といへる。波ま

びらうあらず

むらさ記此

名れ此浦 紀伊

名れうちあを紫と名とあまハ。若らうといふは

小うらうとら

名此

名本此川 水城

神の長とづく。ガキの反ギ。ふつてあがさるる

まゝもれこゝ 鳴よあまつ

人のちまげいふなむせり

朝もれこゝ ちまげをほむ

朝とこゝさうらに鳥の鳴よあまれのわきて朝もれこゝ

こゝわりぬ。む人れ熱ほよあまの

鳴 霧れこゝ ちまげをほむ

ほけよあまの。さてあまののこゝれ朝もれの朝

今一のあまの 小もたらもこゝ ちまげをほむ

俄ワカならぬあり。ハカの水をこゝのりあまの古。ちまげ
小もづこことなる。はたらの朝とめくと同く一もれ
朝あり。まよそとまの字れまよらるべ。さてまの
にほれまほふたこゝ

まの神 鳴

こゝと雷乃事とまのりて。雷乃朝もづけこゝ。又

嵐あまもどいふもちけてまのり

こゝらと ちまげを みてづらと幣帛あり。あまのるこゝちまげこゝ

ふふふふ

ふふふふのふ 大和

是と云ふならずすと。その詞を履ててて素良りか
けしり 又意なきあらともゆり

うら夜

うら夜 和名 昔子 とらふ 是う 集申あはから夜

はそれうら久 念ねともやとてあり。是も素良りと
いふ。是れ詞を履ててて意別よのなよりう

あふふふ

あふふ 大和

は露夜ら世の物志りざられ。くらく此考を付くらま

とねども。あふふふふふてくありぶるああり。祇大人と
唯。卷十三よ 緑青吉と申するふふふを直よの
あひゆくむ。其あふふ。いあふふとあふふて物を
潔或ら眉までもあふふふふ事ふれふふふみふふり。
さふふふふふふふふ。青ふふふふふふ。あふふふふ
ふふふふふ。あふふふふとせらふふ。むふふ。ふふふ。
あふふふふふとたふふとあり。又冠辭考よ。あふふ
ふふふふふふふふ。冠とせる例あふふふふふふ
ふふふ。己よ常世あふふふふふふふふふふ

押てる

難波 橋は

おしよる流連とつげしるを流連北西といふ
へまごふこあまりて難波といふと神代紀よこま
又おしよるのタテと反せハテと作るふりておしよる
ゆめなり

おしよる

あふそ

こまごまやれ河をくらへつるおしよる。やらふれ河と同一
物とらふびあす河あり

わががら

なふそ

昔のむれちるなり。是も流連北河よりけて。流れあ
るよふれ流乃さるるなるなるなり

うみとあす 長柄北ま 橋津
流連北河とつげしる。さるるなるなるなり
河よりくへし。家と孝徳天皇北河居なり

うこをちす 長門の浦 志摩
家命と 長門北島 長門
我命と長うねといふ河のつげあり
さくちよとれ 連庫山 絶句

ありしをたゞしつげあつら。かきとあこ此詞をかき
祈り。露降れ事とく姑部國つ御神此あり
り

己の部

わろくされ

みひ真字持

二道ら動とりありつてあつら。けりめてあつら
あつら

かきつたの

山へくる妹

あつらとらそほあり。さつたさつた。能あるおられ
ハ。あつてあつら。今と薫るゆとあつらといふ。
語意解たつら。ふらふと丹穂あつら歴まで。丹穂とあ
らといふ。歴とあつかさつら。いれりあつら。さつた

に

ひとひる夜はわら

かきつらぬのこゝろ おほへる君

はくしと花のこゝろ おほへる君

山がさだこゝろ おほへる妹

舟日記のこゝろ おほへる妹

秋つねふ おほへる妹

秋の如くに おほへる妹

秋の葉は おほへる妹

ふもやみのうらぐらぐらと。紅葉よもしくしてしむる。

秋乃葉あら。まぶてのこゝろわら

さくらんぼ あし

小形錦とつけこり。細く綴る錦あり

海 あし

ほりうがらなるまはれ金あるは。まぶてのこゝろわら

乃色と赤とれは。丹の一言よくけこり

ぬの部

なすれ

ぬいば 澄流

いつけらちゆりともなびくとも。つぎふんをむかひ
層りナエルの反又ナヒクの反 なるはあり。なすれごと
依^{より}なすれとめらるるまよぐあともあるふんまはな
びくはくつぎを志うらん。又なすれをけちのなすれハ
なすれとてなすれともんぬ

あらしん

ぬの

この部なれあより

ぬ

とつてふ

ねて

百つふらいつこまでもつてゐる家なり。ねてを鈴の
古語。又テの反子音とつておとすものあれはあり。
驛路の鈴とつてこまてもつてゐるものあるはかく
つづけてなり

ぬのふる

二ぬと
本拵

こぬまを本拵とつておとすなり。ノウの反又。れ
をぬれぬまとつておとすなり

ぬの部

きす柳 のこく

根なる
棒

はもとと枝葉はきすゆかりなり。根はきすといふ詞を棒は
らにうつしたなり。爰ららといはず。張棒とせとい
ひて中の白よ。清きよとらして。とむまひてらとさ
せなり。そのぬまを張棒の詞とつてふべし

葛の根花

ぬまを
根

ゆまをこまといふ根を根花といふ義あり。さかひは根と
ひらふ山とてむまといふぬまあれはさかひのみ。今らと

ぬ

を祓んころといふ。ところを諸凝りて。法儀といふなり
おあり。意は細まり。うけて何れをころともいふ。何の
如し云ふ意もある。例如れ意よふある所もあり。是を菱
井根乃とて道合するよふせり

川柳

物もころ

つげよよい

ぬをむれ

宿ての燃

是らぬをむれ懸れ寐といふやとけつげなり

海子あるす

音れを海つ

泣見れこころ声とて海とつげころを

たわつれ

音れこころありゆ

因一意れつげ形り。童とて小児といふ。よ

飛て是す。あよ。たの細とつげといふなり。カユの反ク

あつれ

祓よれとありゆ

こころこころと声とて海とつげころを

の乃部

きねうらのこく

海もあまむ

うららとその蔓日うれゆをそ。又色つ道あふものあれ
ハ。人の言れて後又あまんとつあまよせり

ひあれ

海もあまむ

あまあまも 後をひあふものあまハかくを
いり

徳や川此

海もあまむ

徳や川ハ三笠山の辺なり。是を海といふなり。あま

の

擗こ 船ふねよ 乃のひひををししぬぬりり

れりし心

此こ敷しき緒いとと船ふねよよののりりととままつつむむららふふへへははののりりしし心こころ

ぬ ええ鳥とりれれここここ ねねどどららぶぶ

咽のど呼よととらら。咽のどををよよひひきき入いてて唱なめめららりり。志しれれひひききよよ後ごこことと志しららりり

はの部

ああららひひくく

ささささ

ああららううかかるる白しろ色いろをを魚いさなハハ肌かわよよううけけここりり

花はな鳥とりれれここここ

ななややままままああむむ

毛けららももささ

ささららるる

衣いららああららひひららああららむむいい。志しららつつげげここりり。毛け裳ころもらら

皮かわ衣いややりり

ううららああひひくく

ささささ

寺てら藤ふじくく葉はとといいふふ一ひと言ことふふららいい。ままのの喜よろこみみ此こ柳やなぎととつつ

は

けしるも柳まをくはよわくた

くまろひれ

春申あま

ハルの反フ。ぬと不とおあふ。ほの部よ。くまろひれが
とうくまろひるゆさくろくくとり

あつさる

春

梓もそ他まる弓なり。強といふ詞よくせり

こふゆつご

春

みふゆら三冬の半よりす。みふ申あも十二折を
まふあまふ。実冬とらひふあり。まといと詞。極

小苑百廿一

は後讀ら仮名すよて民布由都藝とあれハ湯り
て次此意よとふ。さふら実冬り治ぐまといふ
つげなり

あごり

春まりこれい

集中よ冬本版とあるふよりて。ふゆこすといふ
らこら。冬源とまらふあれハ。け詞りつく。ま
より版の字去声の時を感とも。又さくむありといふ
ある。よりて版とまげといふ。ま集よ版の字と
よりといふやせり。まてまらりといふハ詞々。くら

御りなま。只まされいひが詞をせむるあり。これら
いとまよーあまうりといひ詞あり。ニアの反甘。又まよりく
まは。リクレの反しあり。うてまされいといひ詞よかり。又
つげのまらまらあは中よりの物あまらるをよめる
春といひあかり

いさかしのり

淡色

雷奥取海とつぐさるる海は。淡よふけり

あつ活れ

淡松が枝

是ら活のあるおととつて活とつぐけり

うがらちす

いとまよとあま

聽れこくお這廻とつげり。いとまよとあまとら。
うがらちの唱時と活あかりするものあはれ。人れあかり
かこそを活をなすまよよふせとあま。いの詞をうく
いとまよとらうちとるありウチの反イあり
いとまよとら

麻しめれ

いとまよがまひ

麻あぞ乃てく。うちまひまよとつぐ。麻乃あま
ちを人のまひあてれをなすふよせとる詞あり

拜と折屈といふ義なり。つひの念とあそび。こ
との反こ。よろしくいふことなる。

たうゆくや ちやあさ

鶺鴒たやきの言くおと。あまの縁縁とせり。是らちやあさ
よかざうと。は例として言くおと。此名よかく
庵

あうちねれ ね

たうちねれ。是なり。ラチの反り。祢と則根と。本と
いふ念とひて。男女ともは稱る詞とす。は故也。日本

小北百廿三

根子あど祢もる号多侍り。又今云阿彌あやといふ
詞と。國史あも萬葉あもんえ侍り。熱田の大神
乃寛平縁起の中よ。日本武尊於甲斐坂折宮有
戀宮こいみや酢媛すわな即歌曰。阿由知何多比加彌阿彌古
波和例許牟止登許佐留良牟也阿波禮阿
彌古波。此縁起と正さあるは家よひきていふ。是
と今もあねといふ詞よむ久て。うちねの縁も女と
さういふ詞とあるなり。さそ縁に記よ日足とあらら
喜ふ義なり。ふと喜ひし母よ志うん。よろそ母の義

讀と民亦後またうち移ら父。うちめら母の露語と
なごいあ々。古例さあさす

あうちしや 母

是ら養うりやあといふほどの詞なり。泪のあやとひ
うらうのひ乃泪とと累して。つめてら足やと成り。
のべてら。うらうしうりやとぬる。ラニタリの日言及
てリの一言とあるなり

ちくそいの ちく

柳葉の母と。泪のうぬれまよひけり

あまよあひ

ちう瀬の山 大和

船の流るるちうるといふ古流あり。それと初瀬乃
ちうよけり

いせりこれ

ちう勢

ちう勢山の堆形と。さうして若おくまなり。
ちうてちうりちうといふつけあり。又初瀬小島と
ちうてちう。ちうり國ともさうい

隠りこれ

豊泊瀬 尾

ちうはほめる詞かくもあり

こゝまは

まうは

汝のこゝまはるるに業よあまひ。三日に大汝と云ふ

まかま

相^い回^は大^お和^ねは^は日^に

まかまのこゝまはるるに

大まは

相^い易^えのこゝま^は

こゝまはるるに業よあまひ。三日に大汝と云ふ
久るおあま相易と云ふ

まかまのこゝま

まかまのこゝま

小苑而女

まかまのこゝまはるるに業よあまひ。三日に大汝と云ふ
久るおあま相易と云ふ

ひの辨

あまのこころ

ひま

天皇此ま一國を御とまてて天よふまへてやまらり。天と
證ひまともつづけたり。ひまを壑中つりあきあり。ハリの反に
十力の反ナ。まろてひまとなる。まろ此まろつこの辨。まひ
まろつたれまよりり。まろひまら日まといふ義。
或ら日の下まろあといふ語新も傳まどるまらまろま
まろり。傳てまろりまら此辨まら

のめまら

ひめまら

ひ

是もあめちるくらに小神と云るらとく。天よひあせ
うらうらと云ありに。むーひんを志うふあまなり
あうらひく ひ

是らあのをあまこのあより
あうらひく 日

あうらひく ひ かつひの反ヶあり

あうらひく ひ 日此こ
あうらひく ひ 日此こ
あうらひく ひ 日此こ
あうらひく ひ 日此こ

小苑百廿七

どもやちる初あり。文字のよと高照と多くうけまじ。
多加比加流とある仮名事よあらしめてあうらひ

あうらひく ひ 日のあ人
あうらひく ひ 日のあ人
あうらひく ひ 日のあ人
あうらひく ひ 日のあ人

あうらひく ひ 日のあ人
あうらひく ひ 日のあ人
あうらひく ひ 日のあ人
あうらひく ひ 日のあ人

あうらひく ひ 日のあ人
あうらひく ひ 日のあ人
あうらひく ひ 日のあ人
あうらひく ひ 日のあ人

あうらひく ひ 日のあ人
あうらひく ひ 日のあ人
あうらひく ひ 日のあ人
あうらひく ひ 日のあ人

つげとよ因に

あらし酒に 一秋も落び

あらし酒乃びの酒。落び乃事と己より。集よら全終にきて。まゝとておせしこと。一秋とてむべし事ありとて

夕日れ 日てるふ

是と日向のふとつり。日言はれ落びあり

あまてらす みるめれ命

みるめれ命とあはむ神は御号なり。天照まの御

少共百廿七

と日の落びあり。いし人あらし酒より落びをたてて。その例あまてらすより。先ひとつり。大加義豆伎與。大良志姫と中もも。高水清足れつげあり。亦王籤入彦嚴之事代神とまもむらけ。いりといけとて幾語あり。神后紀よ見えたり

あらし酒に みるめれ命

とよあらし

あらし酒に ひと

見るめれ人といつげたり

ちもやぶる

ひと

稜威早振人トとつてきて。是と朝敵。或る前も人
なとと志つてあり。日本紀は残賊強慕横悪之神
と云文字とちもやぶる悪き神とあり

あつあ

人

あつあのこてあつあのこり。又あつあが欲希とも秋子ともつてく

垣種あす

人の横言

垣の種あすあつあとつてく。人此中あつあとつてく。かく
つげたり

かざらひれ

日

は縁終々いのか石れあつあとつてく。くあつあり。くもひの
言よくは

かざらひれ

ひとめ

是もおあ

かあつあの美れあつあ

ひとめ

かあつあの美れあつあ。くあつあり。くあつあり。くあつあり。くあつあり。
かあつあの美れあつあ。くあつあり。くあつあり。くあつあり。くあつあり。
かあつあの美れあつあ。くあつあり。くあつあり。くあつあり。くあつあり。
かあつあの美れあつあ。くあつあり。くあつあり。くあつあり。くあつあり。

うごいせに 我ひらひ

藤々ひらげ子とうじものあきハ。是もひらひ

細ようけり

かごいせに たぐひらひ

よは回ト

猪トとれど 豚おけせ

是も猪とれは豚おけせと。うこまりて竹

うごいせり

ひらひは置

ちのれり血槽とつとりのありあり。是も古くつとる
しる細う。既よちのれりといふをいへんをいへん
今もあつといへり

まごいせに ひの沖門

是ら雄畧記よまは事をはああらべしるまは
まて。真木割檜の沖門あり。ま本ら良材といふ。
うそま本らうらまて。作る檜の沖門といふは
おつげり

まごいせに 檜の板戸

よに回ト

まきつら

捨れつまで

はまを今つま本といふよたきだ。はまを捨れ端を
りよ。でといふ詞をだけよて寝といふことをあつた。あ
と小枝あもあつた。俄ちつれの捨れ捨とんゆ。是も
つげるとよ回ト

ひあどりれ

そく

我ひけゆあハ

これとあつたよあ合ををわいおけハ。それふむり
まてあもれあつたが即ひけあつた。うらとひけあれ

ふがされ

そく

えー

磯城瑞籬宮と崇神天皇此皇居とて。古く
久しと伊代の事なまは。已よあ系此まの以。久し
とといふ詞うけてああり。今此系とかりて。古く乃
系良の系とああつた。尚久しと此詞を。久し
とああつた。ああつた。

灘ひら久ひら本もと

ひらーくあひぬ

ひらーくあひぬとつげけり。ひらあは浪を
あさくさくさふ。浪ひらとひら一程あり

二海あり

ひら

是と浪の細とつげたるまであり。二海と云ふ
なり。うらあーさくさくは回一

さふづらふ

ひら

小舟こぶねの細とあさくさくとつげけり
まらまら

斐ひらを

白檀しろまゆ弓引たふめるとつげけり

ころもせれ

常ひら陰かげ

神かみおひらとつげけり

棒ぼう弓

引ひら津つ流なが本もと

う波なみれ

比良山風

まら

あはれ事ことにうら

かざろひれ

唯ひら一目

是と唯の詞と魚とそく。一目のひら浪をか

ふの部

みゆきふる

ふ甲

雪を春枯も降るものなまら。こころみよといま

こころわりふ。実雪とふり

ふりぬる野

垣も多し申す。芦をゆへる垣など。さあくる

里よりあらものなまら。直小ひつけて古ぬる里の

こころは

ふりぬる

ふ

うららうて。人里ふとどらぬもあれハ。かくつけ
しり

うららなく

かろー

よろーにきぎ

きかたをた

かろーにやこ

内くぢみ^ニの志^ニ契^ス。成勢^ニ天^ニ置^ス此^ニ漸^ニ西^ニて。さうり
そめ^ノやう^ノ小^ノた^リ。ま^ニら^レハ。そ^レは^レ終^ニて^レを^レさ^シ。
ふ^レて^レ古^ノま^ニあ^ルが^レ中^ニあ^ルも。志^ニう^レあり。け^レ倒^リ
う^レて^レ今^ノま^ニむ^レふ^レ。大^ニ和^ニあ^ルは^レ古^ノ都^ニと。け^レの

本姓三十三

ふるま^ニや^ニこ^トよ^レむ^レべ^シ。既^ニ赤^ニ人^トを^レ赤^ニ良^ノの^レ所^ニ代^マて
昨日^ノ昔^ノの^レこ^トを^レさ^シみ^レや^ニこ^トハ^ニあり

石^ノ上^ニ

布^ノ留^ニ大^ニ和^ニ

二^ツつ^ニあ^ル大^ニ和^ノの^レ地^名。同^ニあ^ルれ^ハ志^ニう^レあり。祐^ノ名^ニ武
ゆ^レも。石^ノ上^ニ坐^ス布^ノ留^ニ御^ノ魂^トあり。さ^レて^レふ^レ此^ノ洞^ニを^レ石
上^ニ路^トも^レあ^ルま^ニな^シも^レさ^シう^レり。古^ノま^ニを^レつ^レけ
て^レあり

い^ノその^ノこ^ト

袖^ノふ^レ川

と^レは^レり^リ

面^ノふ^レ川

ととめらうが

神ふる山

いづきも布留れ里ある川。美山とあつてけりあり。
神もあも隔くる河なり。又よのくりとり河を。
たなごりとりとみ河り回し。たなごり是並そ一面
け美なり

いぬ人れ

伏見 大和藩

射於人とくきふて。獸と絲らふあなを。ふと
つげり

ふわり丸

ふわりあひぬ

大和藩

男女此るよこへていつく又と鴨あすうりあひぬと
はははりり

あひぬ

まきちり
まの本極ちりまぞう河河。ちりぬをあたはも
あるをあり

あつられ

あつめ

深るる海屋よふくく生ひてあるとらふ。そそ深める
と深るるあひぬ河あり

あつられ

あつめ

あつめ衣よ織るるあひぬ。あつめ衣よあつめ

うたてく少神をある。是ととぶさしとひさうあり。大屋祭
祝詞は何々乎以伐操キリ氏テ木末コスエ乎波山神尔祭ると
云く。新本と新よつらる大木あり

への部

やまを刀比ヒとく

へつふ

やまを刀を焼ヤイ刃バのを刀なり。へつふをへつてつてあり。
まぶてを刀を鞘カサにあり。鞘をへつてつてあり。まぶつくと
いふゆゑ。魚をへつくとつてあり。カフの反ク。よ
つてへつくとなる。満ミツへの一言小の例多し。人の逆言
やとを満ミツをへつてつてあり

こもたつと

平群ヘイグン河カ名ナ人の名

菟ウを編ヒふと。繩とへつてくあめバへの羽よつてけ

くり。あそ此事といの波港田の西より
 くりくり
 八重くり
 つげくりあり

平郡の山ち報
 へくり此山

蘆垣ササ此この

水みづ

穂のこまをようけしる。芦ぐさら。穂やぐらゆひこ
 むるを此やま色ハあり
 ほるやす ちのう
 粟あわれごとくほれうとらつげあり。ほらら火か懸かとい
 養やしなり。でたお通ふ
 うらひ此この 水のう
 是ら火か此この穂ほとつく河あり。穂らあらりき半を

ほ

いさり火は 今火とわたり即火種あり。は露潭の事ら。いの部
岩垣割はあふくくくく。又京行紀はとゆら火は
火中又立てともふ光り。さて不始るといふ詞は意ら。は
不始れあのをま。はく詞よくていふあふむとあはゆ。ん
火中らあふくくく。やうあて。見定あふくく。あはれハ
ゆりともな。いとも見えく。ぬるまをくく。あふといふ
小あふく。美あはれ。三よふける火乃ほあはぬ
さしとあはり

いさり火は

ほふくであん

燒る火は

ほふくであぬ

つけとよ回

とゆる火は

火中

景行記小毛由流肥能本那迦尔多知氏斗比
斯岐美波母とあり。即ほのうはあふくく。あはらむ
物をおと隔てん分ぬあはれハ。ほのめさ。はゆ。つ
け。めう。さめさ。あり。カ。の。反。キ。ほ。の。め。さ。ら。

物あは

ほのめう

海のうめを此海まで。さうあらぬをいふ海あり

ちいす紀のころ、 穂小切一吾とや

穂小切は多とくの紀久米にあらよ。いふと志はひび

しるさぬよつけしり

孫穂蓼と 穂積はあそ人の名

穂積は多く出る蓼なり。是と積の海を撮よとせ

つげしり

水蓼と 海つとち和

あらは飯字。さづくしとめて。うたへしとそり海。つげ

妹が目と 妹が目と

妹が目と 見まくほりに 採は

妹が目と。見むと欲まといふ海のつげあり。一クの反ム。倍云

ほーまといふ者なり。是ら見まくと應とそく採はり

うけしり

志とがこ やつまらよ

磯と石。論とめぐりといふ。うことととなり。秀方真國とよ

れひいそゝるをいふ候あり。秀とほつといふと秀といふ海

と目ト。ヒイの反ト。亦ひとほとあふ。是と神武紀

伊弉諾尊イサノノミコ目メ此國コノクニ磯輪イソノカミ上ノ秀真國ホノマキ云イハレは必カナラと振カタり
 ハ倭ヤマト一ヒト國クニの事コトなれども。今イマ々々國クニの想オモひよよむべし
 うちのウチノ心ココロは 依ヨ保ボ大オホ和ニ
 うちのウチノ心ココロは 出デとトうウは

まの部

於オ旁ホ此コノ心ココロ

おのこころ

秀ホノとトおのこころココロす。あまの心ココロハ。人の心ココロはまの心ココロに
 似ニたり。まの心ココロは人の心ココロに似ニたり。まの心ココロは人の心ココロに
 似ニたり。則すなはち縁ゆかりの義ぎあり又またこころココロををもつて

くまの心ココロ

まの心ココロ

あまの心ココロ

おのこころ

なることとつら。あまの心ココロは人の心ココロに似ニたり。まの心ココロは人の心ココロに
 似ニたり。まの心ココロは人の心ココロに似ニたり。まの心ココロは人の心ココロに

有り。是もまへの河なほけり。びりらまき新婦の
あふふしくなり

奥山北

まあの板戸

まあら奥山よけまあ物あまハあつひ

まあらこのま

はさめ

はそくさくたの物くぐめ此あま妻しくなり

まあめハ。正目ありめと見の河おまかうてまそ

鏡正見といふまよつげなり

大はれ

まの糸 ち和

小笠原

是ら根の事とあつなり。まぶてくはたぐひ此毛との事
といふ例多し。よつておほくころ大にある神といふ不
この詞あり

古衣

まら此山 紀伊

古衣まらうちとつげなり。タウの反ツあり。古衣と

あらしをりて石よりくるあまハあつひ

衣

まら此浦 紀伊

ま袖乃わつはといふ詞と。まの詞と下よめらし

てなり

うらゆふれ ことさ まさ記ふ

うらゆふれをくひこのまゆをいふ。ふとこら到て狭きもの
ある。真狭國まささな此處海とせり。いつき山でもせき
ふとあつていへ。は河神武紀にこそえり
たの志り むちく田居 かくたといふ地名
おくまあり
ち刀れ志りを鞘をいふ。いふへと珠をりてうごま
ぬ。珠巻といひあつ。まくたといふは。タリ。つけ
り。田居と別ぬあつり

みの部

ふとけれ ことあらぬ

ことさとことといふ。ことよつけり。ことさからぬとま
わらぬといふことあり

ふとけれ ことこれ

これもおあつてけあり

響みろく神かみ此 こと 見まへり

雷乃あるけり。ことさおそり。ことおされハ。あつ
けり。う。ことさおそり。ことさなり

み

まを鏡のま

見

附見此詞よづけり

あーうまれ

おひいされて

芦垣とそらひぬおあまひ。こゝれとらやよひけり。

おまひいへんさしるまをあり

蒨

菰此

おひいされて

蒨まる菰のそらをぬふさ

とま夜れ

おひいされて

これ引ほしる菰れこゝれしるふよせり

たまれをれ

おひいされて

細れうらまれこゝれしるまをあり

蒨根れ

おひいされて

夜ら根のふくく入されしるおあれあり

蒨

刀

おひいされて

是と今もよぶのこゝれしるまをあり

つるまを刀

おひいされて

まをかくみのま

おひいされて

見ともく飽ひやのまあり。いけのまをあり

かどとれとく

三ちふちてや

是と接して三ちふちてや。つげの心
よく三ちふちてや

志ぬれ

英ぬの圃 英法

心と多きとつ詞。志ぬれと志あるふなり。十フの反又。百志ぬ
ことハ幼らば志あるふとつ詞とある。是と義とつく
義の毛と志あるへるものあるハ志あるけく。のどぬといふ
と古候あり。亦卷十三小百故年三野之圃とく。同卷百小竹之三

小苑百四十八

野王のやまとある例ふらりて寔に志ぬとふなり

志ぬれ

三ち

幾語をけしめよ。是とひさしとらよ。美ともとるべ
けれど。是とふらりあめよ。かゝる幾語あるは。宮と天皇
はを及取あるふらりて。天とつくと志あるへ

甲とれ

あは浮あて

人のあはらうふよとせたり

うち日さぬ

三ち

うらうら日さぬ。ツクニキの四言反して

千の一言小ある。まのまなりやくらよせたり

朝日此 日てる宮

日てるら日てるらまあり。ラスの反ルあり

日此 日うけるや

日うげるら日新入あり。是もかやくとぬとら

木の根此 根もふ

木の根此さくひろこりこるが根とふあり。ま此根つく

ひろまよこ

竹の根此 根足

これら竹のさうゆるふたへん

平竹此 ま

さす竹を枝葉此さくひろこりこるさ

はも竹此 大ま

是もまとりゆゆるらよま回。大ま人と友人あり

ま ま

ま ま

ま ま

ま ま

高座たかざと云はれ所産。是こら蓋いしと云ふ一かゝる事もちき
ハ。あつつけり

おやみみれ 三差さんさ此こら

是も蓋いしのむあり。つけとよは一

まがごうれ 三差さんさの山

うまごうれ 三輪さんりん大和

味酒あじと醸かとよと略一と。みの酒みうけり

うまごうれ みもろの山

みうけ こむろの山

小菟百卒

あを解とあり。うけゆとこもふもあまハあつつけり。
一おこむろとゆとあり

うけむふ 南洲なんしゅうの山

こもろと巻まあり。貝かいの名。是も佐所さしよ小むろとけり

うりせりひ 実まあり

うらとをあり。せと助すけあり。空くう一貝かいとよ小同こどう。実ま

あつと識しありなり。うりせ貝かいとよ人のまあり

うりせりひ

あつとあれ 三差さんさ伊勢

龜屋とあの館あり此所より。さて珠北中も勾玉と
せく。その中も三宅は勾玉とある不きとれハ。あつこ
まうとぬとつと細とつとつと

未目と

こそめ姑婆 西未洋

妹が目と見そあつとつとけあり。け地名と大伴坂と
即女。海見の田居より見るとせる地名とよあれハ。定めて
左和の中ありと

こひうし此

ちわけのぼろ

こひうしと大伴あり。此文は室宿と負ふとつとつと。

小英百辛

こひうしとつとつと。厩牧令。馬寮式ありと。神
寮飼ありとつとつとつとあり。是と殊負牛ハ寮飼と
つとつとつとあり。宅をやけとつとつとつとつとつと
て。別寮ハありとあり

まを鏡

見宿女の浦 抄は

是も見とつと

大伴此

ちわけのぼろ

是とつとつとつと久米此とつと神武天皇の所あり。
久米の命と大伴氏の先祖あれハその心をとつとつと

里と云ふ。又云うとらやと云ふ一と云はあまハ。其の河をけ
てしまはけとらやと云一

大津此

足らふいふ

是と云は河をかくうけたり。お見一とらやと云
こつとらや河あり

うみるま

こら此溪 橋は

流はこつとらとつけたり。紀伊准后の所は経るの
所はあまもよあり

古たつこ

三重の河系 伊勢

小苑百卷二

此は此河と云ふむがこつとらと云は三重也。八重
と云ふ河のあるよつげの河も志あり

橋此

美衣利の里 小石河

橋の美とつけたり。是と云はくみのつとらと云は

あつとらと云

幸系此

こづ保乃水

瑞穂也。又穀の穂はこつとらと云はあまの河なり。
葦と云は長く茂り葉ゆる物あれハ。是またと云て。森
と云す。天孫あまこつとらたまふ日向の水と云はあまこ

英豆楳の玉とく入るる事。日向の玉とてはそりし事と
おのふら遠へ里。己よ万葉書に二。人奮乃る事。葦
系といふ語をともぎ。水楳の玉とてなり。大日本
此事とも先り又葦系北中津必とあり。是れ玉の
ひらけざる所と葦系といひ王化の事とありと申す
しよとく入る事

白細砂

三津抄

是ハ細なる白砂此らくくくくくくくくくくくく

小菟百字三

むの部

又さうは

むろ姫命

さうはらと語あり。さてむろといふは。つら眼を
向ふことといふ。それとて天にまきむろといはる
つけけあり

おつく日

むろ

おつく日は即ち日あり。つくの詞と。結づくをづく
あどいふは。回く。そは方よ。概ゆくといふ。夕つく
日と夕よつく日あり。さうおつく日むろといはる

む

あをみれそを胸をさるごとく。あううとてあるものな
きい。こゝとてこゝとて家紋とみるるのみあり
りるれこゝ

解と班ひら圍うらとらみ河のつらめあり。クラの反が。あは解
うれいらららなあり。つらけらうくすゆ

ひらるれこゝ
たまたやま
むと拵むと

とやけらあ業あり。ヤスの反工。うらてまをさるとなる。又
まゆとらみ河と。物のさうららららら。むと拵むとなる。様

の葉とてまをさる。或唐と様いの河とらまをさる。むと拵
様とらみ河とのつらけあり

そぞれ
むと拵

むと拵一團とみ穀のまをさる。ぬみけらあり。まをさる。む
とらみ河とてまをさる。そぞれと背肉そぞとてまをさる。肉うの
まをさる。あまをさる。むと拵とす

めの部

味ささぢふ

めごと

味鴨多歴あり。味鴨を多群を引て歴はたされハ。
志つづけしりの反メあり。めとら見言してなる
事云ふあり

味ささぢふ

めがほり君

めがほりらとてうく欲とらあり。つげのさよふねしく。

めとかるる

わらさつふ

めふらわけども

め

目ふあくところ。わさささささ此胞やよりあつた。多く見
ることをあささ足乃ころりあつた。はげけれ
よれころり

あちさりか

妹々め

是を妹の涙を履いてくめよう

ころりか

め

是も同く

ぬえころり

めあーあさ

菱艸の芽めとがさ。ぬえあえ回渡つたの意と芽と

妻とおあーああさハあさささ

あささ

たぐ一目

是らなとれこの詞よつて。アハ事と唯一目と
けしあり。あさと事と仮字。あさとたぐくもの
あささ。あささこの言れあひえ。あさ事とささ

もの部

くさろひれ

とゆり

霧彦のまらいの跡岩垣のまらひ

さよつらみ

とちち

小丹出さよつらみらいの跡妹ととちちらよらり。爰ららぬとちちれとちちら
くけらり。とちちらとちちらとちち探とちち出るととちちらとちちあり

橋を

りべの家 守勢あり

あゆもつらごとく多とちち遲とちち摩とちち毛とちち理とちちととちちら人とちち。常とちち世とちちれ
ほよらり。けとちち実とちちをりてとちちらりとちちらとちちらり。橋とちちをとちち書とちちせ

も

とひふんまつけしり。ひとこり橋といふ名も多遅の初
とろつせりあり

とろつびれ ひえおらま

是ら早蕨さきびのひと。とえるとろつして。表ら艸本
ともよ藤ふじゆるおされい。あつしり。さわらびのたると
げりれ河よらあらず

やの部

あひまは 山

この部本はる乃新よふくしり。蕨わづら本はあまら山
といふあとのつけあり

釣蕨 八重山

此をれ河まつけしり。八重山とらさありしるひと
りふ

あひまは 弥つ峯

あひまは 弥つ峯
おほくはら縁あり。つぎけの急あやゆ

つまづり

やがこれ山國幡

矢と握り持物あるハ。爪隠矢とつげり

はまこさ

やが神の伊勢佐良

はげけとる同

あまのま

やまの國

欽明紀よ。元年七月遷都倭國磯城郡磯城島云
磯城と崇神天皇も都し。又欽明天皇もた
ま。終つ郡の名とま。喝へて。ふ乃名よる
ていひあむ

そらそら

やま

日本紀神武条二曰及至饒速日命乘天磐船而翔
行大虚也。是郷而降之故因日之曰虚空見日
本國矣云云是とかくあるがま。り。四言の
録あり

そらふら

やま

つげの意より回。そらあてんつるやま。とわ。ハ。
これと又小の詞とく。へて。み。の。録。と。せり

あまのま

やま

参拜まゐりと申されは。参内此義あり。八十字知人とう
の御字活の亦よくわいくとり

うりせと此 八十ことのへを志けくとも

是らうりせこの代とくる詞を。ヤリの反ヨなきはうく
つげしり。八十言のふら人語の上あり

百つこみ 八十の島田あま

八十の粒々。やくて百りいふれハ。百よつこみといふは
けあり

こころまに 八十のちまひ

縁渡々さの物ささりふの重なり。家々とのさめく
りいひまれしるを。街の事よりうりいふ。街と路股ちまひと
いふ義あり

百たらし 八十濃で

つげよまたき。くまら物のあるあり。でらどげといふ
義あり。八十をまればいふ斗の詞あり

百さるば 屋を海のさ

つげよま同し。素摩もと此本と和名曾波まな此本。又曰
方本ともあり。ままこれうへよやの云をおきいふるを多おほ

といふ。やと孫あり

百うらな

山田の石

是もやまうらな

そのふれ

八十とせのふ

今も武士乃事此をよしのふとおぼゆ事ども古くは
さるわうちなく。一回よのふといふを富りたる人
よのふ

そのふれ

八十とせめり

そのふれよのふといふはさるるに数多ふといふれ

ハ。八十といふ詞小くけり。うらな八十とせめりたるを
うらなせにれやそ付のふれよのふ

そのふれ

八十のふ

つけれえよとおき。ゆも亦ひと能くならぬといふは
八十乃詞とせといふ

まづみ

やまひ

説文は恙蟲名入腹食入心古人草居被此害故
相問無恙乎。集中都々美無久とも。亦無恙と
もふあり。寔はまづみといふもめりも則恙といふ。やまひの

後語とやるとえより笑えしなり。やまひらやこなり。

三七の反こ

うらあづく

やハもい

楯並附矢とつけしなり。楯と矢とみせぐおられハ
なり。やハもいと弱層あり

杖うらぬ

やうらぬあげい

杖と丈あり。八尺と丈よりうらぬあづく。うらんとんこ。
嘆と長息あり。息と八尺の嘆とつらととらる熱を
あづるあり

やまふたれ

やむらむらあ

やまやむの御をなむしり

さびし路のこく

やむらむらあ

縁のこの節いそせらのあまなり。路の結ぶあ
り思ひれやむらむらあ

あまげれ

やまげ

よくり回

鳴鳥れこく

やあづら

あまの結ぶ鳴つぐふらあ

ゆの郷

ゆがつく

ゆ

是を幣を白髪ありて。看とつよほどの涙を。とつり
 してつるなり。哥り四船早還來等白香著朕裳
 裾尔鎮而將待。こまると孝謙天皇遣唐使よりまわり
 一舟製なり。さて神ありハゆかを流りすそおの
 かりされて。おつとする古例なり。にともあり。神あり
 まらる月経の絶る老女をよてするあり。即白髪此
 うらふあるらありのうらまてゆの事と白髪つけとう

ちりけよふみあひつむ

ちうづつく

ゆふと花を

ゆふの白さを花うとつるなり

ちや川北

ゆうくもあらず

ちや川のゆくもあらずとあり。カクの反ク。是とあざぶと
つる細きをつだけしなり。あまやうしと見えぬがしなま。
人のまゆくとつくとあざぬりふせなり

あづをれ

ら矢をそと

杖あざむら。ら矢をそとむむよ。刑人のまゆとふせなり

ふうあひて

ら削の河系

ま縁とらま縁あり。絶とせらげづるといふんよ。ら

小百合花 は削の地名よらせなり

ゆりもあらん

ゆり花河をさきて ゆり 縁もさるゝとら細よりなり。
ルとの反り。ゆりて縁とを解てあり

ち船北

ゆらうくふ

寛くら今ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ざる事ふらせなり

天雲此 〰

ゆら〜

こぼれ雲此 〰

ゆるる派

のこく

ゆら〜

ゆら〜とち〜るさ海と〜り

ゆるる派

ゆら

ゆら〜とち〜るさ海と〜り

ゆら〜

ゆら〜

葛ら〜とち〜るさ海と〜り。ゆら〜とち〜るさ海と〜り。ゆら〜とち〜るさ海と〜り。

由久倍の飯名あり

天雲此 〰

ゆら〜

雲らゆき決すなる物ありハ〜

ゆら〜

ゆら〜

〜とち〜るさ海と〜り。ゆら〜とち〜るさ海と〜り。

ゆら〜

ゆら〜

ゆら〜

ゆら〜とち〜るさ海と〜り。

ゆら〜

ゆら〜

是と射うる猿はといふ詞を。ラルの反ルあるはつめて
いるといひしり。然らむと手負ひても。ちりりして死ぬ
あまの。まきと猿はたどふおむずるあまを。ゆむといひ
詞りてせしり

天を此

往還ありむ

是と人の膝のまゝふ。まゝらふくゆきかへる地あれハ
それよとて。そかへまぬくへる詞あり。あんを中
知の詞あり。志これともあまをまて。自此事ありむと
ある詞もあり。さるとまて。リナノ反ラと解りて。

爰よていひ。さうらんといふ詞とあるなり

とあらふ

ゆきあひれとせ

ゆきあひれ
ち和

ゆきとつけらるるふくまきゆきとせと早稲あり

うきうひれ

夕さうこれハ

うと夕日の目乾入といふ詞よつきて。陰日の夕と

つげらるるあり。うけらひうけらむおをふ

妹が紐

結ハ川内 あまの ち和

つげのまきゆ。まて結の詞よくべー

さうびとせ

弓月が嶽

ち和

左都人の穠まきり。神代紀は穠の事とた知とり。
ちつおまふ。つつけらとつつけしり。らとゆとりふら。
ら削とりふごころ

よの部

あぢさりふ

兼登いさだ

味鴨多歴あるといふゆえ。兼い例よせしり

まごつり

まごみの系 164

まを蔓匏とつけしり。天を首此るゆえの初久く此

天の西より

あつら

ふら此の 西多祥

らをひけはるおあまふあり。まべてらふらある乃
河とつけしり

よ

あつら

東より藤む

らにな末あきあり

名くら

右洲の山ちね

くらーとほむつ河。今いふ名くらさくらま回し。右洲の
いふくへよりあつらあり

いふはがれ

くらこれにち

いふはがれは備は備多。今いふまらねど。いふくへと多く
よりつとひくもれさふよこまえつり。よりてくらこれ河り
づく

ぬをむれ

ね

射干の子らむて黒く。よりてあまづく。毒くハ
いの初夏の雨より

ぬをむれ

夜亭

玉藻あす

より藤一妹

玉藻のこらくあつらとひむよりれづくけあり

あつら

よそ

無垣らあつらとほむつ河。今いふ名くらさくらま回し。右洲の
あつら
おの溝りのつとひくもれさふよこまえつり

夕見れ

ふそ

夕日たるをうりあり難きハ。ふそとハつてけり。

日言の終極

天雲此

ふそ

言と隔る相あるハ。是よとて入てふそとハつてけり

うりやこれ

世

世も現在あるものあり。現方比せしづく

あつて

ふそ

是を繫釧好とつけて。此れ言を。莫泉の御よせり。

不英直士

莫泉古事記小の豫母都。祝詞よハ与美津。何と

と同語。まゝとこれ訓を。代罷トクといふ義あり。一カ

リの反え。亦とてとつハ。こも此をを通りて

いふあり

まふびこれ

しそ

横山

古も眉と畫くけり。こと古款よ。ゆ尚を山とまはら眺よ

うとへつること仲哀紀あり。こもとて横山と

あり

水にま

ふそみの池は

とらと海にけしるまをかり

わの郡

こ海つるこ

こまみか系 英徳

こまつるこ 乃付くるおされ くの海にけしる

こ海つるこ

新新

つげあま

たまさるる

吾が

吾魂もさるるありとらふるを此をさるる

はつげありつたふりも吾心とけしつげなるある

と。吾心と我葬す。ふりありと定くる後あるらふらふ。

わ

とも葬の奴少しせしむる事ハ。我のよもゆる烟をどく
の道と。皆が持のれ事と云ふぞん

朝露此 こころ 吾身

是らなるあふんしくしてしむる

あふ此 こころ 吾子

あふる泪とつけしす

鏡あり こころ 吾念ふ妹

鏡と常りしる物なれハ。こころよなるん。あふ
つけしあり。あふる泪とつけしあり

あつたれ こころ 吾れ こころ 吾ハ

天を此 こころ わる こころ 吾ハ

百つ こころ 吾ハ こころ 吾ハ こころ 吾ハ

百つ こころ 吾ハ こころ 吾ハ こころ 吾ハ

班田 こころ 吾ハ こころ 吾ハ こころ 吾ハ

ちね此 こころ 吾ハ こころ 吾ハ こころ 吾ハ

船の渡り こころ 吾ハ こころ 吾ハ こころ 吾ハ

涙 こころ 吾ハ こころ 吾ハ こころ 吾ハ

あふ こころ 吾ハ こころ 吾ハ こころ 吾ハ

ふ洞あり。今春此言とはとあはれをいふに遠く。
よりやうら若やうあるの洞。カヤカ十の四言反一でカ
とある。又カヤの洞おもしろくかとのびていふやう
とがり

長祿四年

おの部

おのがき

おのの指は

おののきをら^{おののき}おののき一名。友とよこひあひてりきまぬれ
新れ^{おののき}おののき。又しきまふ事と。おののきとあびると
いふ義あり。カこの反井、是ら引きふ事を^{おののき}おののきと
いふあるふあをせしむるべし

おののき

おののき

まうす^{おののき}おののきとつひたり。おののきとつひたり

急の部

物見 こく

急とさうえ

物日らふいあうる物あるはあつてく

うまさけ

餅ま香かの市ち 諸も

酔まといふ急まうて急まれ一まをりつてけり。何まをれ急まなり

不ま急ま部ま

木の部

あま雲此こも

たぐくせあらぬ

雲乃おくはえぬ物あまらぬ。あつづく。おくうのが
はあくうあらぬのかあり

むくげ

たぐ

おくとく真まて。唐れ發せり。おくふおらふなど
よめるは表ふあらうさだの義あり

朝雲此こも

あさてしうれハ

是は妹あどさけしあまて来れはとらうり
御り

六

つり

露霜此こく

並てしれハ

つげとり回ド

やと畏るす

おもひまらふ

ハこの及こふて。人のおもせぬようり

鳴神此こく

音

あつさうのこく

音

ゆくあれこく

音うーしり

是と音もあふこく入て。おとこ此事よこ

小笠原

春風此こく

音あし如形ハ

春風はあらく吹物あよ。志はがこれこれ吹え
物とよふあふらわたり。是と春風詞を林と
久ても。音も回つげとあふ

ここのこく

おとのこめ

うその事ををともひ。水産歴奥とつげり。仁徳紀
小淵難曾虚赴於淵能鳥苦咩とあり。さて奥を
の仮名あり。ここのこく。ワ井ウエオのそり
まで。ウヲの反才とこまハ。仮名此こく。よりあきしけ

義なり。ふんそおきまかろ。ねさる即奥あり。又一由は
よるまてら。海の底よある所はあり。こまらあはつて
けよよりそ。極う座りそよまきまあへ

わつここれ

神

うの歌うこれ西まふしくとり

虚

ちけ ちけ

凡の言よりくる。そうらうそふらそらねがえよて。かぞへ
くろさとりこい。たかろこれゆりうけたり

まぶづらみ

義王

紅顔の王とほめしえあり

春津神

秋王

凡人よをさう神と王ありといふ義あり

安見

義王

知るは依よる事といふ。天望ら安まり知しめすと
義あり。義王といふ只上階一人を貴くしりて二心ある
あれは。やしを民までもあるあり

ものさらよ

ねがやけ ちね

こまらあはつてら。又多きをさつとりかろ。廿

藤原乃發れまれば。おもひの涙を流す。ふれこぼり
きりこぼり

あつむれこぼり。 おのひも先や

藤原のちかおもひもやげよさうりおあれい。それよよ
せて。まふれ如くありひもさうさや。ありひもさうさあり。
おのひもさうさ。なげやりよありひも捨るさうさ

あつむれこぼり。 おのひも先や

若草の別てあすべさおあれいあり。若草の思ひ
人よこぼりこぼり。又おもひも若草もつぐ

あつむれこぼり。 おのひも先や

つらさお蔓乃さす言へまひゆくおあれい。あつむれ
こぼり

雲霞のさく。 おのひも先や

是もおのひのさく。おのひも先や。おのひも先や。おのひも先や。

山も山の人あり。大れ字をつげく。おのひも先や。おのひも先や。
乃ちけよさあまうさ。おのひも先や。おのひも先や。おのひも先や。
大の泪をつげてあがめていあれい。大の泪をつげてあがめていあれい。

水みづ あゝ

奥津おくつ 小島こしま

さうさうと遮さへなり。さうさうさうさうと不詞あり。ラフの
反ル。今もさうさうとさうさう。唯あを満る。あゝ小島
なり。堪たるるなり。あゝ

小莖百八十二

部外乃翁語

叙じゆ 太刀

いろこ山 万葉卷

冠辭考かんじ 小こハカク續つけて後語ごごと云。集しゆよハ叙じゆ刀た鞘さや
後ご拔は出で而を伊い香か胡こ山さん如何いか吾わ將が為をとつつききここる
向むかなり。いふ語ごと滿みはまハとて。ハ言ことといふ滿み之例
な多おほままバ。品しんめ此こ翁語おきなご乃を並ならよハ出でささる。是こト下くだ此
如何いかの語ごといふむとてかくらと續つけし向むかとふふや。
ふつて是こハ伊い香か胡こ山さんいふとつづけしといふ部外

部外

出す。又冠辭考の流れごとく、うつら撃刀といふ詞のあきハ。
打撃伊香胡とひびきとをいへるなりむ。伊香
胡山と述にあり

真島怪

うまて乃社万葉巻

雲梯うらまてと大和必言の市郊。事代至今と齋いそへるあり。
出雲國造が神賀かみか此詞よりいゆ。さてまゝ此半定
めごと。今然此尾とまねといふをむくて見まば。
然あも侍らむ。然此尾流流とふことなるも

ハ。其居所とままくあやふきとあん

吾妹子と

去來見此山万葉巻

吾妹子といひむといふ詞乃つけあり。万葉集
名寄といふ冊子ハ伊勢と出た。此堂より集
六年持統伊勢の西へ行幸此時。石上大臣後三駕し
ふことたまふとわさひなる伊勢此西乃山なるべきが。
志ろとそふをつくふとせむおなり。そし其姑山
なるといひといふ詞を隔てふことなる。ふらそ

小海人

青雲此

白麻之津

冠者考は曰。青雲は白雲を連る。白ては語り
冠らせり。集中。青雲は棚引日とら小海人
あるとらめる云あり

青幡此

忠坂山 万葉巻
十二

同いハク。青幡は白幡あり。忠坂の云刑部此官名
小海人の白旗の於佐加とらつけり云々

青旗此

本旗 万葉巻
二

同いハク。是も白旗とて。喪葬の衣帷旗々と白細
布と用らるること云々

兼て歌夫人の記は曰。青と白とといふ例曾てなり。
加茂とて後世白馬とてあたらふと唱ふる事な
り。又白と縞とをいふことあり。白と縞は移り。ま
くもつゆり物なれハ。けえなりと。物乃抄などにも押
て青と白と。万葉考などにも。この白と青と

定めて流せり。は後甚紅ゆくとやむ。先は天年勝と
白とと取がくも。第一條の流は曰。續日本紀天年勝
高野天皇二年九月十日。將肥後國葦北郡人刑
部廣瀨女日向國宮崎人大伴人益所タニシ獻白馬
朱眼。青馬白髮尾云云
是加茂王乃流のごとく。青馬り白るある。何ぞ
白髮尾の詞と以てこととすむ。さるる青る白髮
尾なると事とする事と。おりの常あるおりの常驄馬は矣

なる葦花毛葦花もあけん。ある是と事とて歎せし
ある。漢語抄云驄青馬也云云。此とより。青
白雜毛などあると事とす。青馬と白馬と異なる
るゆゑとす。又武家にて馬毛此馬の中馬の中の
つひつひ毛色を。是は青字を以て黒字の
りとする事とす。かゝる毛色は遠ひとす
かくとすへはけりとのまじむ
説文長箋曰、性、人之陽氣。情、人之陰氣。情、

陰故从青。性陽故从心生。性無欲者从心生。情有欲者从青心。陽白陰黑故从青寓戒也。是ら此義有り有りて。お似るる黒馬あるは。乃字よあきて。青馬は。貴人の曰は。己よ今驄馬と献り。是白馬とあをうまといふるを。

取りくくさ旨あり

同第二條の流は曰
 万葉卷十三白雲之棚引國之青雲之向伏
 國乃云云青雲り一白雲なり。蒼天乃云云
 あへてつらぬべしや。まを云と別蒼天乃云云
 とはりあ。又万葉卷十六伊夜彦乃於能禮神
 佐備青雲乃田名引日良霖曾保零々々々

あり。是と山巾と云ふ事源を可るれば。俗の
まを天にけしとあり。跡部中ら小敷を不降
んじ。又万葉卷之二。向南山陣雲之青雲
之星離去月年離而とある。天武天皇乃
崩御ましくけりといふ事あり。と蒼天の星
あまてと。若原おふる事あり。ありたりとんじ
同筆三條の記より曰
まをり。向ととさる。まをり。向と。同とあり

らみつら神なる詞も結り。是らとていふは。まをり
青雲とて。白雲とて。まをり。まをり。青柳。
まをり。まをり。青垣。まをり。まをり。まをり。
まをり
楓も雲の白肩といふ事あり。神武紀は徑至河内國
草香邑青雲白肩之津云云を神の海へといふこと
をたしめあり。たましく。まをり。まをり。まをり。
まをり。まをり。白肩と云ふ。まをり。まをり。まをり。

たりともいえず。おりのまは唯地名にて。また白旗
といふ名もいへし。加茂のまらひもいへる。また白旗
事といひつものむとおひより。なれどもいへる。あや
おとまれむ又

青旗の悪坂山のより刑部此官名よかゝるし
あまていも。刑部の旗は白旗と立られし例書で
し。ふつて神功紀は信新羅人の降人と成り
白旗とて事とせしる事とありあはせ。刑部とせしる

降人あまていようの官なれは。この幡のおとあ
つけしりといふ説あり。青旗は白旗とあは
強てもそ説は付べけし。たのふごう。また字
と白とと取あもあけし。降人の白旗と取あ
あはせむ

青旗の本旗云々 天智天皇降所
の時の事あり

是亦葬式は白旗等もあはせし。あはせし
はゆき。また白旗の本旗ありといふ説あり

け況も甚直あり。古の葬式、委くそ葬式此
りて傳へど。唯枕ありてはさあよそねいふふも
白くよそひ察りてあど侍りて。白くよそひを
らねしもあはれも。家よ青旗とくうるか
らハ。古の葬式ハ。青旗と用おらさるんぬやと
見るうそそあるべし。己よ万葉集と分半とけこ
おのべくう。古のうそと知るうけ書よそねいふ
うもさるやうにや。万葉集と用おらさるんぬや

青旗の本旗といふ下の注。是は葬式の旗ありと
する。之よりて直なる考へたり。さて青旗の懸
坂といつげしる意いふぬゆも考ゆ。例よよ
可てり。青旗のごとく懸坂といふ。そのの
ちの打あひるをやうけし。又青旗の本旗
上平賀欲布跡目爾者雖視直爾不相香
裳とある。本旗の爲終よ青旗とわさるりも
えん。さて右この爲終と記あるいふ

の後あらむ。さてけあら。金山舌日下鳴自首聞
早ヤノニタヒカモトニナクト
 何嘆とよめ。交あり。もとより世より序あり
ナカマカシ
 ものまで。おし人の声たよさうらと。うらさむとあり。
 上れ十七を序とせり。あられハ秋山のあつひと
 みるつげのあつひと。唯やうくよとひけせ。あ
 ひがやよほといやハ。うらうら秋志のひきれひと
 うとさど。唯鳴るあつひと。涙こそよと梅りる句
 ありとれ。秋山之樹下隠遊水乃吾許曾
秋ヤニノコノシタカクリユクミツノ

小苑百九十一

益目御念從者とよめるあよひとくおもへハ
ニヤメ
 是ふハおぬ
オモヒヨリ

けをかしと
つるされ

冠者考よ曰。御佩平劔之池云こをういふつる
ハカシヲツルキノイ
 ことといふべしと。喜れぬハ平とよめるあつへし。
 よといふべしと。半といつるも古鏡小例のり云劔
 の池と大和心高市郡よと云ふ。おのまら兼て
 け説とす。吾大人の曰。古鏡よ半の劔とてよ

の詞又久ていひる例もあられハ。家小じき合
せりいづき例も形一。まの平ハとの言よひま
ふれハ。まの言よ此とあはれ一此とあり。いさまも
けこそく一ととあま。此詞よこれハよく支ゆ志
くれともそ例もあられハ。よ此詞ハとりがう。さて
は縁終の言と志ひていも。古より記祓代の條草
形藝の大刀此因縁と申る所ハ以御刀之前刺
割而見者在都牟刈之大刀云云都牟刈の詞

不延百九十三

と畧して細とハハのあらむとあまよりこれハ。御佩
をこそ細とハ中とあまあどいふはとの言よ。乎此詞
とりてうとらるを。なる平とよめるハの言よ。一
とあり。よて先初外は此

まららぐれ こが乃 万葉書
冠家考曰麻久良我乃許我能和多利云
同ト地のかれよ。まの言を定めてまのいふの
右の條又同ト。さて久良我てふ所の名也。久良

の反許ありハ紛て許我ともひーあるかくハ
うさねしるなりなり云々

和名抄よ武藏國久良岐久良と志多し。今上野
國よ倉下と申て久良我といふ驛有。下中
小右小右海と申て許我と唱ふる有云々
は後をいぬぐ。先クラの反コ小あらび。力なり。
志多ればまかぐといふ御ある。さるはまこがれこが地
名をうさねしるなりなり云々。吾大人の後今

小苑百九十四

ら上野下野とを分きて。あふこと小ね臨まてどひう
らまらうがといふ有。右我といふ流りもあけむ
となり。さるは石上布留。左依あり此はあど
つごさる小田トさうとそ

うちうさる
冠者考曰仁徳紀よ于知和多須那那餓波
曳エ難須ス企キ以利摩リ章章區区例
こら磐磐之之姫姫皇后山脊の筒磯磯の宮小坐坐とあ

ほして。天皇難波の宮より幸ゆきまされる事とをかく
原の長ながとまわり来ることをませしむるあり。志こころは
ハ。打と例の縁ゆかり。こころすくなくとるこころ小
て。冠かんむりらせしむることをなすり

かく此をまそてハ。形かたち餓波曳がなひ難須がなんすとしてさへか
所ところ何なにをなす。吾大人の説いふ曰いふあるをさへこのるお
ひは福ふくど。もち此くのおりあり。多おほなる者。衆
となすは泥ぬ田たあるふか糺ただとぬりくる糸いとを引ひき

たきして。唐鴨たうあひとらる。是と長をえしむ。ゆいこれ
ら此何なにのゆかりとつくるあるを。ゆいあり
糺ただを引ひけて多おほなることまをさへかあり。
あられハ原の長とまわりくるこころ。歴あきて衆おほなる
長をえなすとたきくあるよあり。ゆいあり
となり。定めぐるこれハこころなす
あしとらる。ちりくハこころ

是と契沖せきちゆうの説いふを以もつて。冠かんむり考かん小出せうでせるまあり。

け詞と武烈紀と大伴の大連。兵と系良少は
 物して船此岸と殺して。城妻此影媛是とあけき。
 大連を猪小とよみて。猪、水辺小うられて。船と祿
 らあともよみぬら。船と夫の名をよハさるゑとめ
 たり。さて猪ども、事の己よいり。こつらへり。里
 水付畔隠あり。又い後後とい紗と物と事と。
 此後後につけとい條のり此とよきと事と。猪の
 水畔小と事と事と。外此水あもよきと事と。

並少女さび

御心乎

若登此水

御心

廣田水

御心

長田水

け三と冠後考小ハ後後とて也なり。吾六ハの
 後小ハ宮あがし。その四と方後也其一ハ人廣
 乃吾後の宮とよめる長水
 御心乎。吾野乃國之花散相秋津乃野邊

尔。宮^{ミヤ}柱^{ハしら}太敷^{ヒキ}座^マ波^ハ云^ク
とあるはけあり。是らいかも所心をうへと。う
りたる詞のむむもはるまじ。吾とあるは所心
とあり。うへむむはるまじは太敷座^{ヒキマ}波^ハといふ
句よりのりて是句の意をむまへハ。五言此を以て
たるとふとあり。次の二句は神后紀小大照
太神誨^{ミコノミナト}之曰^ク何^ニ當^ル居^ル御心^{ミココロ}廣^ク田^ノ國^ニ云^ク又^キ事^ヲ
代^ニ主^ト尊^ニ誨^テ之^ヲ曰^ク祠^ニ吾^ノ于^テ御心^ニ長^ク田^ノ國^ニ云^ク云^ク又^キ事^ヲ
云^ク云^ク又^キ事^ヲ

小苑百九十七

冠者考ふハ方藝ヲ乎と云ル詞此例ヲなす。ひて
所心を廣田とも長田ともせよとつくれハ。言は
のうりたる幾許のありむまははこれ。所心を廣
く廣田のよは居るむむといふ義あり。
長田と云。吾と所心を長く留り宮あり。云。
長田といふといふ義あり。よて是くの幾許の
例よりあり。但又その詞も別の詞も加へて。
所心を廣く留り宮ありと云むや。云は

神心のとつ河をくぐりてくむとも。つはりのさつあ
ゆべし。思定めごもをりておぬよゆも

あはまづ

ひろむねく 百五巻

安波乎呂能乎呂田尔於波流多波羊豆
良比可婆奴流奴流。是と安波峯乃。田
よける田食葛少もゆらむ。又撓葛あれハ多和
の仮名ある好よさる事ハあづ。何よまれ今
紫雲英此如く。田よむひわらる蔓草と見ゆれハ。

小菟百九十八

ひろむねく 百五巻。蔓と。ひ方よひけ
ハいつこまでもつまきとひて。引る物な。引ハ
ぬくくと家と此美あり。ぬくくと今ハぬ
ぬらぬらと藤社河へ梅へて引ハ志るハ藤
むらむら 百五巻

あさくは社

とく 百五巻

舞とけくも。もとと重をやく用花あれ
ハ。速く年の回をよつハけらるらん又鄙哥

よふ。べでたの詞ととの詞よふあるおふり。より
て薙れも。けしとひ流りきどもそは。常あき
半う花はらなく。本槿とあさう海とよめれハ。もは後
えごう。いづれも定う。いそ後流られハ。おみ
いそひ

かほ花れ

こひてうぬらむ 旧巻

かほ花ら。さぬくは流きども定めごう。何よ
まれ貞花の如くある妹と恋てう寐らむといふ

小菟頁十九

後やり。ノコトクナルイモラの九言反一七ノの一言
とある

祢つこ草

あひんばあらむ 旧巻

は祢つこ草もつまびらうあらは。考ふに根は草う。
何よまれ草ら。祢つこ草は。く祢つこ草は。妹
を相んばあらむといふ。け乃あは後ふもを人
らんが

あは草は

あは草乃 根は

万葉巻

是と云ふ白と云ふ詞と。よきとよしとてつはとせる中
侍らむ。さる様の字と集申ままべてもささくま
せり。万ま考考様様字も花花と定めて論論たり。
契契沖沖至至と様様茅茅子子と名名物物ありと代代匠匠記記よよははと。
志志ううれれとも唯唯引引馬馬野野爾爾仁仁保保布布様様原原ともありと。
十月行幸の時此秋秋なれハ。是花花ハああらぬぬはあり
と如如といひて委委ししもも侍侍ららぬ。吾吾主人主人花花様
と定む。記記曰曰。様様と茅茅子子と名名あるををと。ららり

集申波理波理と波藝波藝と仮名小字分け。又針の
字と様様はは返返りりするするるもも侍侍りり。都都ああららりりままのの別
様様といいふ。東東の方方ままはは是是と様様の本本といいふ。其其の
皮皮並並はは実実とと若若くく物物とと深深むむ。是是昔昔よりり此此侍侍ららり。
よよてて古古ままああららぬぬ衣衣をを白白くくすすともも衣衣はは摺摺るととし
ふふめるめるなり。白白くくははもも摺摺るととまま深深くくをを知知ららぬぬ
此此詞詞あり。又又集申様集申様の字の字茅茅子子の字の字花花の字の字又
波波藝藝波波義義波波義義ととするするる仮仮名名あり。よよててささららぬぬ

ともまやて出せ。おん百そまうり。その中よ榛の
 字と申するお中物ともよすそあまり。さてつば
 らよ是と申す。榛の字と申するうらま。衣を
 白りぬきよめるおとめて。巻の字と申すうら
 てまこえぬ。又茅子萩あどまらうらまの
 咲らるさあよりうらめて。秋の字と申すよめる
 おれとあり。是榛と萩と吳地ある他あり又雄
 畧記よ文よハ榛の字と申すよハ。波理能紀能

亦此三百一

延と申すれハはは榛の本なるものなり。又
 茅子の巻のハは山上松良秋此花の七種
 る旋頭哥よ。茅子之花乎花葛花瞿麥之化姫
 部志又藤袴朝良之花是茅子の字なる事あり
 らけし。又榛が枝よハ肘多と申す合。茅子此古枝
 よハ骨と申す合。さるあど。さるさひくさるおれさるも
 ろくさるまじり又巻の七よ不時班衣服欲香衣針
 原時二有鞞又卷十二思子之衣将摺尔尔保

比與島之榛原秋不立友と傳り。さると万葉
 考よハ次のふれと出しくこの仮名也此ふも伊
 加保呂乃蘇比乃波里波良といふ仮名事も出ず。
 さて二考此ふと秋あり孫ありといふ事。榛此
 皮をさぐ。實とると秋の語をさぐ。その時ふあら
 孫も衣と指とよめる事とよめる海へもあぐ。秋葉
 子此意よりん考といふ傳りといふ事や。如二
 之因念此ふなれハ。針と幸る仮名よつて榛を

亦苑二百二

ちりといふしへさきりあり。又卷七ニ屋
 ノニオラセルヌアリ
 前尔生土針ありといふ仮名事もあはる。卷二よ
 傳り狭野榛もおきく。さぬちりといふべしとぞ

跋

世に發語乃意を説ありし書に抄
詞燭明抄がけり免由て。冠者考是の法
ありきれどその抄の半とりて説ありす言
發之が存よりりてねん事姑志之が未り
仍るて。其後姑小語とて之を發し
傳らむ。又そのうへに發したる如くら姑

3-4

安永二年七月刻成

享和四年甲子二月木板

京都書林

日

大坂書林

江戸書林

尾張書林



序

梅村宗久

名

末

名

孫

